

ISSN 0917-5695

1992年6月28日 発行

埼玉昆虫談話会

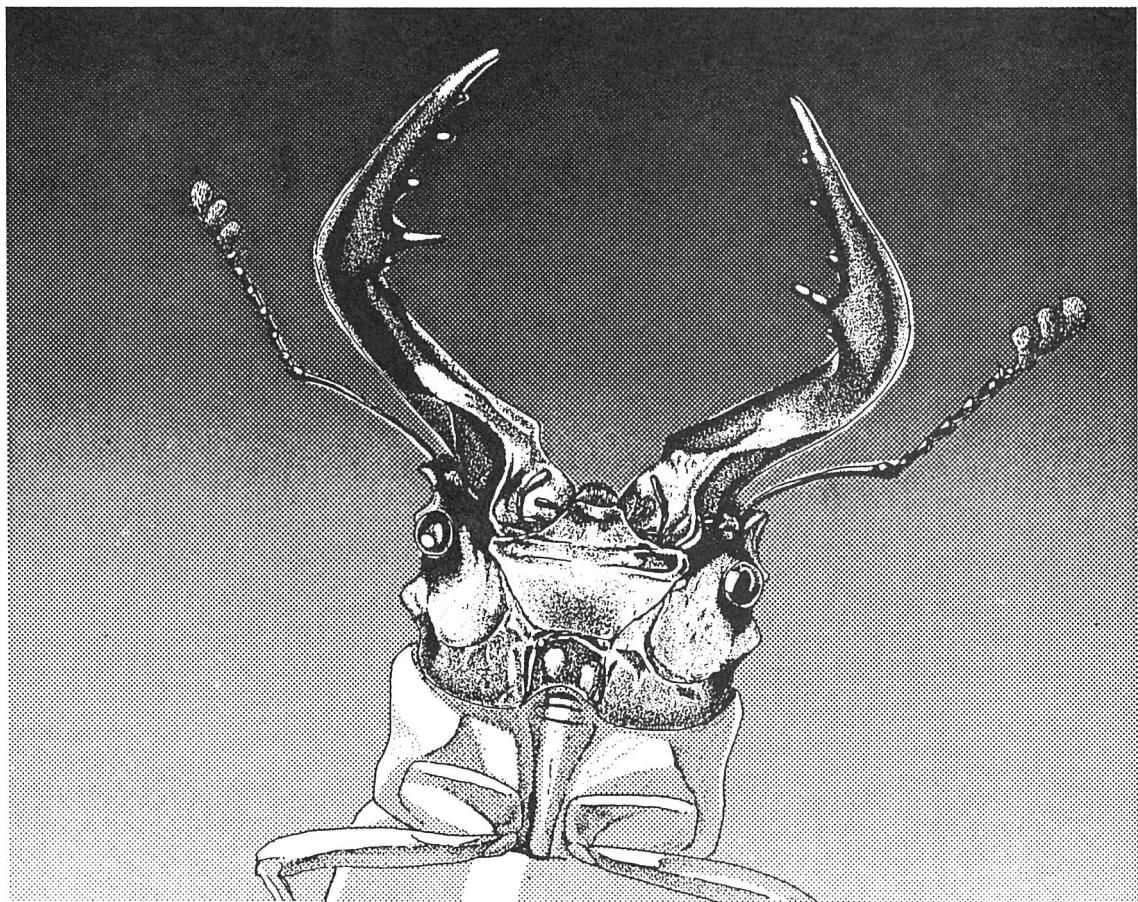
寄せ蛾記

64号



所沢の鳴く虫について

武藏野台地のクロヒカゲについて



表紙デザイン：小堀文彦

埼玉県の興味ある双翅類(4)

Ptecticus sinchangensis OUCHI, 1938

(ミズアブ科, Sarginae 亜科) (本州初記録)

玉木長寿

これまで埼玉県からは、ミズアブ科の *Ptecticus* 属に属する種は、最も普通に見られる *P. tenebrifer* WALKER コウカアブと、*P. aurifer* WALKER キイロコウカアブの2種が知られていたが、筆者はそれらの他に、埼玉県からは未記録であった2種を、本県の毛呂山町から採集している。今回はそれらの内の標記の1種をここに記録し、あわせて、それらの特徴について、毛呂山町産の標本をもとに、文献⁽²⁾を参考にしつつ、触れてみたい。

尚、本稿に記録する標本の内、1標本についての同定、ご教示と、貴重な文献を賜った鹿児島大学の永富昭教授に厚く御礼を申し上げる。

[採集データ]

Ptecticus sinchangensis OUCHI, 1938 (本州初記録)

採集地：埼玉県入間郡毛呂山町、大字箕和田字(北山), [比企南丘陵]

性別・採集日 1♂, 23. IX. 1978 (写真1, 2); 1♂, 採集日不明

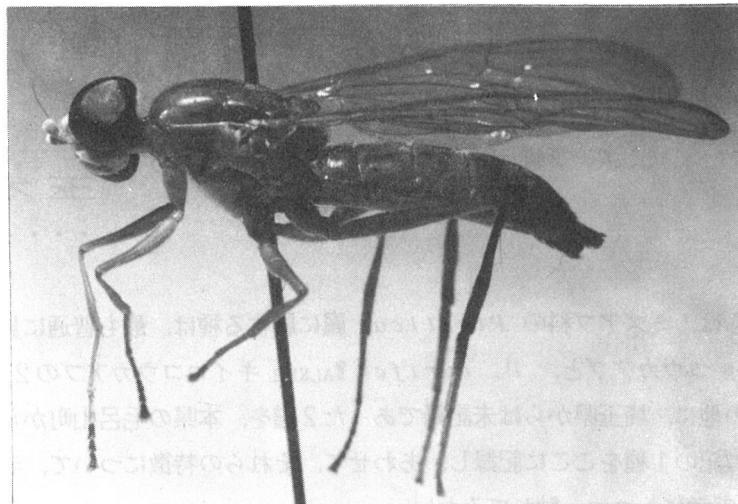
採集者：筆者

標本保管者：1♂は永富昭教授、他の1♂は筆者保管

[記録の概況]

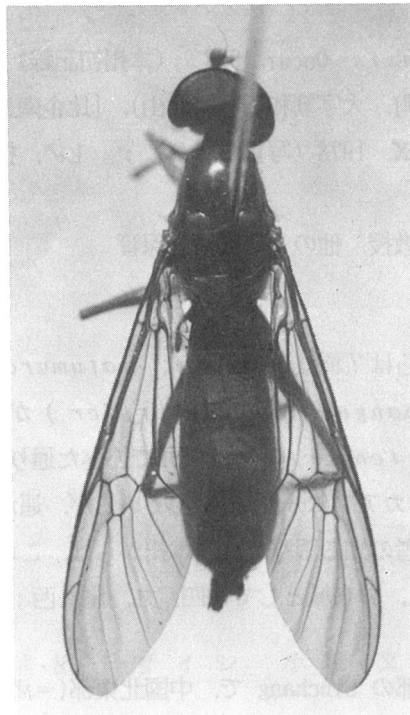
この属に属する種は、日本からは7種 (*aurifer*, *matumurae*, *okinawae*, *okinawensis*, *shirakii*, *sinchangensis*, *tenebrifer*) が知られているが、それらの内、最も普通にみられる *aurifer* と *tenebrifer* は稿頭で述べた通り、埼玉県からも既に記録されている。前者 *aurifer* キイロコウカアブに一見、良く似ているが、遙かに小型の体を持った別種である標記の *sinchangensis* は、筆者の知る限りでは、本州からは、これまで記録されたことがなかった。(日本産昆虫総目録、II⁽¹⁾にも、分布域として「四、九、屋、西；中国」が挙げられているが、本州は含まれていない)。

元来、本種の原産地は中国東部の Sinchang で、中国北東部(=満州)、奄美大島からも記録 (OUCHI, 1938, 1940) され、後に、日本の Sarginae と Pachygasterinae についての報文 (NAGATOMI, 1974)⁽²⁾ の中で、「四国, 1♂; 九州, 1♂, 1♀; 屋久島, 2♂, 1♀; 西表島, 1♂」が記録され、分布域としては「中国東部、南西諸島、四国、九州」が挙げられているが、日本では他の地域からの記録はなかった。



1. *Plecticus sinchangensis* OUCHI ♂ (埼玉県毛呂山町産) 左側面

従って、埼玉県
からのこの記録は、
本州からははじめ
ての記録となろう。
この様な種が、
本県の丘陵地帯で
も発見されたこと
はまことに興味深
いことと考えられ
る。



2. 同 背面

[形態的特徴]

♂：頭、胸、腹部、脚は概ね、帯黄色から黄褐色。

頭部：帯黄色から黄褐色であるが単眼三角区、後頭、頬は帯黒色；額の下部と、ときに顔面と口吻は帯白色か、又はほぼ帯白色；額（下額の上部を除き）、単眼三角区、頭頂、眼縁後方の後頭、頬、顔の上、側部、第1、第2触角節と口吻などは淡黄色毛でおおわれ、それらの毛は額の上部では長く、頭頂、頬、顔側面、第1、2触角節、口吻などでは短い；しばしば、第2触角節の毛は黒色；頭頂の幅は（複眼の最上角の水準で）、中央の単眼の水準での額の幅の1.6～1.7倍幅。

胸部：黄褐色、淡黄色毛でおおわれる（肩瘤を含む中胸背板の前部、翅側板の中、下部、後小楯板などを除き）；中胸背板（前、側部を除くが、翅後瘤を含めて）。小楯板、亜小楯板は黒色短毛をそなえるかもしれない；平均棍は黄褐色。

腹部：黄褐色であるが、第2～5背板には、その前縁から離れ、その側縁にまでは伸びない暗褐色～帯黒色の基部横帯をそなえ、それはときに第2～3背板では2斑に分かれ；第5又は第4～5腹板は暗褐色～帯黒色；第1腹板と第1背板又は第1～2背板の側面では直立し、その他では横臥する淡黄色毛、第1～6背板、第6又は第5～6腹板と交尾器では黒色毛をそなえる。

♂交尾器は図3～5（文献⁽²⁾より引用）参照。

翅：翅膜は一様に、僅かに黄褐色を帶びる； R_{2+3} 第 $2+3$ 径脉は R_5 径分脉の基部よりも長く、後者の2.0～3.4倍長（手許の毛呂山町産の標本では約2.4倍長）；第2基室と第5後室との間の翅脉（=m-c u中-肘横脉は *aurifer*, *shirakii*, ときに *tenebrifer* に於けるのと同様に存在し、肛脉室の柄（付属脉）の長さの2.7～3.8倍長（手許の標本では約3.6倍長）；中央室と第1後室との間の翅脉は、第1基室と中央室との間の翅脉よりも長い（手許の標本では約1.4倍長）。

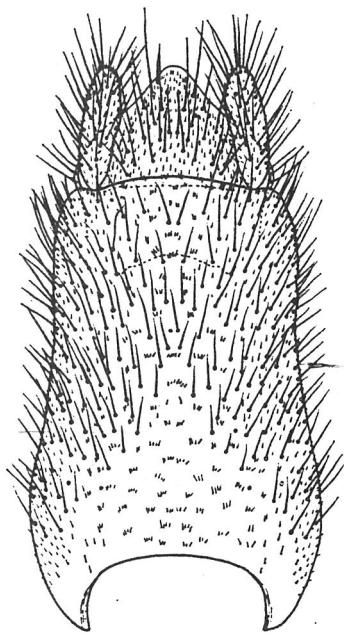
脚：黄褐色、概ね淡黄色毛でおおわれるが、後脚の脛節と基跗節の基部は暗褐色を帶び、主として暗褐色～帯黒色の毛で、跗節（第1節の基部を除いて）はほぼ帯白色で、帯白色の毛でおおわれる；前、中脚では第3～5跗節は黒色毛をそなえる。

体長：♂、8～12mm.（毛呂山町産の1♂では約8.5mm 体長はより小型）

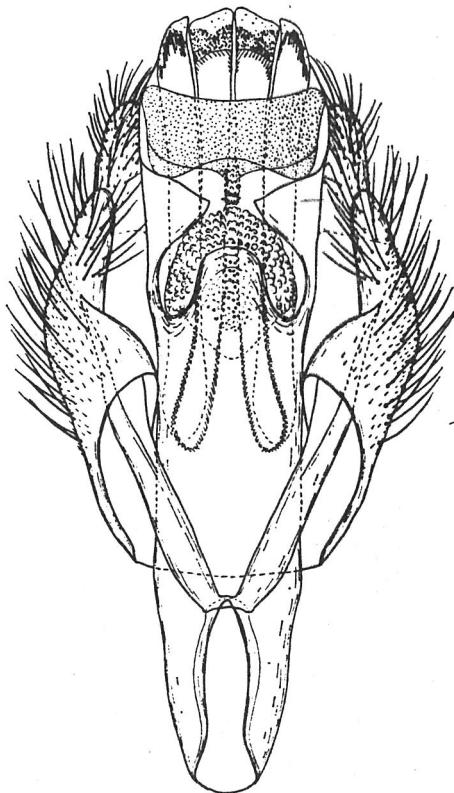
ここで参考までに、本種によく似ている *aurifer* キイロコウカアブの主な特徴について簡単に示してみると：

[*aurifer* キイロコウカアブの主な特徴]

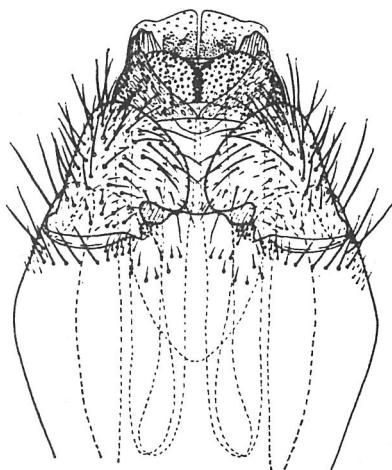
1. 腹部は黄褐色、第1～5背板に暗褐色～帯黒色の斑紋をそなえ、それらは第1～2背板では、通常、2斑に分かれ、（ときに第2背板で4斑），第2～5背板では前種よりも大型、第4～5背板ではほぼ全面、又は大部分を占める。
2. 翅は強く黄褐色を帶び、末端部は明らかに、そして、多少とも暗色を帶びる。
 R_{2+3} 第 $2+3$ 径脉は R_5 径分脉の基部よりも短い。（前者は後者の0.6～0.9倍長）。
3. 脚は黄褐色（後脚と径節と基跗節の基部も黄褐色）。
4. 体はより大型（体長：♂ 16～22mm）。



3. cerci, proctiger
と epandrium
(背面)



4. 交尾器
(背面)



5. 交尾器先端部
(腹面)

〈図3～5は、NAGATOMI, 1974より。なお、各図の下欄解説は筆者による注釈〉

〔参考・引用文献〕

1. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共編 (1989) 日本産昆虫総目録 II.
2. NAGATOMI, A. (1974) The Sarginae and Pachygasterinae of Japan (Diptera:Stratiomyidae). Trans. R. ent. Soc. Lond. 126(3) : 305-421.

(たまき ながひさ番号350-04 入間郡毛呂山町前久保 332-122)

0492 94

6527

手写の番号

訂正

埼玉県の興味ある双翅類(2), (3)の訂正箇所およびミスプリントの訂正。

(2) 《寄せ蛾記61号》

p. 1156 上から14行目 ; 位置する。 ⇒ 位置する)。

(3) 《寄せ蛾記62号》

p. 1219 上から10行目 (写真11の説明データ) ; 24. IV. 1983 ⇒ 1. V. 1983

下から3行目 (写真12の説明) ; cercus ⇒ cerci

p. 1214 下から8行目 ; この数に向かう林… ⇒ この数の向こうの林…

p. 1223 上から12行目 ; 数百m西方に向かった。 ⇒ 数百m西方に向かった,

p. 1224 下から3行目 ; 生息地が発見させる可能性 ⇒ 生息地が発見される可能性

(訂正 ; 玉木長寿)

.....

所沢の鳴く虫について

石澤直也

.....

埼玉県の直翅類については、埼玉県教育委員会発行(1978)の埼玉県動物誌で山崎柄根氏が纏められているが、同氏が指摘しているように県内には当然分布していると考えられる種でありながら記録がない物が除外されている。

筆者は所沢市(種として山口地区と三ヶ島地区)で1984年から調査しているので、その結果をここに発表する。

記録されたものは10科62種におよび、県内で過去に記録が無かった種や、久しく記録されていなかつた種も含まれており、当地は狭山丘陵の一角としてかなり自然度が高いと言える。例えば、ナツノツヅレサセコオロギがかつて生存していたことは注目に値すると言える。他にもウスグモズ、カヤコオロギやササキリモドキの他ショウリョウバッタモドキなど当地での初記録が出ている。

記録日は最初の記録しか記載していない。また、場所の記載のないものは全て山口地区の物である。分類はHalzの分類表に従い、族は省略してある。

直翅目 ORTHOPTERA

キリギリス亜目 ENSIFERA

コオロギ上科 Grylloidea

コオロギ科 Gryllidae

コオロギ亜科 Gryllinae

1. クマコオロギ *Modicogryllus minor* (SHIRAKI) (三ヶ島) 1984.10.7 早稲田大学キヤンパス 建設で田圃が埋め立てられ、最近は鳴きを聴いていない。
2. エンマコオロギ *Teleogryllus emma* (OHMACHI et MATSUMURA) 1984.8.16
3. ツヅレサセコオロギ *Verlarifictorus nippensis* (CHOPARD) 1984.8.16
4. ナツノツヅレサセコオロギ *Verlarifictorus* sp. 2♂ (小手指) 1984.6.23 この日夕方小手指駅前のバスタークニナルで聴いたもので、これ以後確認していない。この時期鳴くのは間違いなくナツノツヅレサセコオロギである。この種は、ツヅレサセコオロギと違って卵が非休眠性を有し、幼虫で越冬するので、県内の分布は南部に限られるものと思われる。
5. コガタコオロギ *Verlarifictorus* sp. 4 1984.6.28
6. タンボコオロギ *Verlarifictorus parvas* (CHOPARD) 1985.6.2

7. ミツカドコオロギ *Loxoblemmus doenitzi* STEIN 1984.8.16
8. モリオカメコオロギ *Loxoblemmus* sp. (L. questrius SAUSSURE) 1984.8.16
9. ハラオカメコオロギ *Loxoblemmus* sp. (L. arietulus SAUSSURE) 1991.9.12
10. タンボオカメコオロギ *Loxoblemmus aomoriensis* SHIRAKI (三ヶ島) 1984.10.7
11. マダラスズ *Pteronemobius nigrofasciatus* (MATHUMURA) 1984.7.1
12. シバズズ *Pteronemobius mikado* (SHIRAKI) 1984.7.6
13. ヤチズズ *Pteronemobius ohmachi* (SHIRAKI) (三ヶ島) 1984.10.7
14. エゾズズ *Pteronemobius yezoensis* (SHIRAKI) 1984.6.9
15. ヒゲシロスズ *Pteronemobius flavoantennalis* (SHIRAKI) (三ヶ島) 1984.10.7
埼玉県動物誌では1976年新座市野火止の記録しかないが、丈の低い乾燥気味の草原には極めて多い種である。
16. カワラスズ *Pteronemobius furumagiensis* (OHMACHI et FURUKAWA) 1985.10.9

クサヒバリ亜科 Trigonidiinae

1. クサヒバリ *Paratrigonidium bifasciatum* (SHIRAKI) 1984.8.17
2. キンヒバリ *Anaxipha pallidura* (MATSUMURA) 1985.6.23 本種は、当談話会が三ヶ島で調査した際生息が確認されたもので、丘陵地の谷戸の休耕田の叢に多く、雨上がりの夕方には素晴らしい合唱が聴かれる。
3. ヤマトヒバリ *Homoeoxiphia lycoides* (WALKER) 1985.8.25 寄せ蛾記No.50で、西村氏が日高町のものを記録しておられるように、本種は雑木林の林床に多い。
4. キアシヒバリモドキ (キアシクサヒバリ) *Trigonidium* sp. 1 1984.6.9
5. ウスグモスズ *Usugumona genji* 1989.8.21 ♂, 同 8.24 ♀。その後、同10.21 ♂1, これは山崎柄根氏へ標本として送付、'90.8.5~6に♂♀各1頭、同8.11に♀1を室内で採集した。屋外に時々出す観葉植物について室内に侵入したらしい。
県内では初記録で、山崎氏の話では庭木伝いに都心から分布を拡げているのではないかとのこと。

カネタタキ亜科 Mogoplistinae

1. カネタタキ *Ornebius kanetataki* (MATSUMURA) 1984.8.17

マツムシ亜科 Eneopterinae

1. マツムシ *Xenogryllus marmoratus* (HAAN) 1985.9.19 狹山湖の堰堤の下部斜面にのみ生息している。最近は極めて少なくなっている。
2. アオマツムシ *Calyptotrypus hibinonis* (MATSUMURA) 1984.8.25
3. カヤコオロギ *Euscyrtus japonicus* SHIRAKI 1985.8.25 この種も堰堤の下部で見付かったもので、最近では夏場の下草刈り（刈り込みは5cmに規定されているという）が徹底しているため、数は少なくなっている。

カンタン亜科 *Oecanthinae*

1. カンタン *Oecanthus longicauda* MATSUMURA 1984.8.17

ケラ科 *Gryllotalpidae*

1. ケラ *Gryllotalpa fossor* SCUDER 1984.6.2

コロギス上科 *Gryllacridoidea*コロギス科 *Gryllacrididae*

1. コロギス *Prosopogryllacris japonica* (MATSUMURA) 1984.8.18

2. ハネナシコロギス *Nippancistroger testaceus* (MATSUMURA et SHIRAKI) 1985.7.11

カマドウマ科 *Raphidophoridae*

1. マダラカマドウマ *Diestrammena japonica* BRATCHLEY 1984.6.16

2. カマドウマ *Diestrammena apicalis* (BRUNNER) 1984.7.6

キリギリス上科 *Tettigonioidea*キリギリス科 *Tettigoniidae*ツユムシ亜科 *Phaneropterinae*

1. ツユムシ *Pharoptera falcata* (PODA) (三ヶ島) 1984.10.6

2. アシグロツユムシ *Pharoptera nigroantennata* BRUNNER 1985.9.14

3. セスジツユムシ *Ducetia japonica* (THUNBERG) 1984.8.17

4. サトクダマキモドキ *Holochlora japonica* BRUNNER 1984.8.17

ウマオイ亜科 *Listroscelidinae*

1. ハヤシノウマオイ *Hexacentrus japonicus* KARNY 1984.8.16

ササキリ亜科 *Conocephalinae*

1. クビキリギス *Euconocephalus thunbergii* (STAL) 1984.5.8

2. シブイロカヤキリモドキ *Xesthophrys horvathi* BOLIVAR (三ヶ島) 1986.11.23

3. クサキリ *Homorocoryphus lineosus* (WALKER) 1984.8.16 当地にはヒメクサキリも生息していると思われる。

4. オナガササキリ *Conocephalus gladiatus* (REDTENBACHER) 1985.8.25

5. ウスイロササキリ *Conocephalus chinensis* (REDTENBACHER) 1984.9.17

6. ササキリ *Conocephalus melas* (HAAN) 1984.7.31 (幼虫)

ササキリモドキ亜科 *Meconeminae*

1. ササキリモドキ (ミドリササキリモドキ) *Xiphidiopsis suzukii* (MATSUMURA et SHIRAKI)

1986.11.23 個体は狭山湖畔の榎の根元で見付かり、腹部が食いちぎられていて交尾器が残ってい

たので確認できた。本種は1975.8.2秩父郡両神村から記録され、その後飯能市日和田山で1978.8.28に山崎柄根氏によって採集記録されているが、狭山丘陵では初記録である。

ヤブキリ亜科 Tettigoniinae

1. コバネヒメギス *Chizuella bonnetti* 1985.7.7
2. ヒメギス *Metrioptera hime* FURUKAWA 1984.6.9
3. キリギリス *Campsocleis buergeri* (DE HAAN) 1985.8.4
4. ヤブキリ *Tettigonia orientalis* UVAROV complex 1984.4.29(幼虫), 同 7.12

バッタ亜目 CAELIFERA

ヒシバッタ上科 Tetrigoidae

ヒシバッタ科 Tetrigidae

ヒシバッタ亜科 tetriginae

1. ヒシバッタ *Tetrix japonica* (BOLIVER) 1984.5.4
2. ハネナガヒシバッタ *Euparatettix histicus* (STAL) 1985.10.20

ノミバッタ上科 Tridactyloidea

ノミバッタ科 Tridactylidae

1. ノミバッタ *Tridactylus japonicus* (HAAN) 1984.5.4

バッタ上科 Acridoidea

バッタ科 Acrididae

ショウリョウバッタ亜科 Acridinae

1. ショウリョウバッタ *Acrida cinerea* (THUNBERG) 1984.8.16
2. ショウリョウバッタモドキ *Gonista bicolor* (HAAN) 1985.8.27 狹山湖堰堤の下、北側の草地で見られたが、これも公園の下草刈りで絶滅した。

トノサマバッタ亜科 Locustinae

1. トノサマバッタ *Locusta migratoria* LINNAEUS 1987.8.2(幼虫)
2. クルマバッタモドキ *Oedaleus infernalis* SAUSSURE 1984.9.27
3. イボバッタ *Trilophidia annulata* japonica SAUSSURE 1984.9.2
4. ナキイナゴ *Monogolotettix japonicus* (BOLIVER) 1984.7.1

ヒナバッタ亜科 Gomphocerinae

1. ヒナバッタ *Chorthippus brunneus* (THUNBERG) 1984.9.27

オンブバッタ科 Pyrgophoridae

1. オンブバッタ *Atractomorpha lata* (MOTSCHULSKY) 1984. 9. 27

イナゴ科 Catantopidae

1. コバネイナゴ *Oxya japonica* (THUNBERG) (三ヶ島) 1984. 10. 6

2. ツチイナゴ *Patanga japonica* (BOLIVER)

3. ツマグロイナゴ *Mecostethus magister* (REHN)

4. フキバッタ *Parapodisma* sp. 1985. 8. 2 種名未確認

(いしづわ なおや 359 所沢市山口 1644-15)

北本市でダビドサナエを採集

三宮 幸雄

北本市高尾・石戸宿にて、ダビドサナエを以下のとおり採集したので報告する。

ダビドサナエ *Davidius nanus* 1♂ (未熟個体)

採集地：北本市高尾

採集日：1992年4月21日(火) 晴 午前11時30分

採集者：三宮 幸雄

本個体は、高尾氷川神社府きんんの泉湧地付近の草むらから竹藪に向かってフラフラと飛び立ち、静止したものである。

同 1♀ (未熟個体)

採集地：北本市石戸宿

採集日：1992年4月26日(日) 晴 午後3時30分

採集者：三宮 貴史

本個体は、石戸宿北本自然観察公園内の沼で、バタバタと浮いていたものである。

(さんぐう ゆきお 364 北本市西高尾 1-259)

北本市におけるダビドサナエの採集記録

磯野 治司

筆者は、北本市内で以下のとおりダビドサナエ *Davidius nanus* を採集したので報告する。

北本市石戸宿；1♂ (羽化直後の個体), 25. IV. 1992.

北本市高尾；1♀ (羽化直後の個体), 26. IV. 1992.

(いその はるじ 363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A202)

武蔵野台地のクロヒカゲについて

田 中 岡

私は、武蔵野台地の東端に当たる東京都北区・板橋区をフィールドにして蝶を探集・観察してきた。地元東京の蝶に关心があって、自分の住んでいる北区や、板橋区などで「普通種」の蝶を躍起になって追いかけた。そんな中で、コジャノメ・クロヒカゲは、採集するどころか姿を見ることもできなかった。それが当たり前のことだと思っていたのだが、1度だけ、フィールドについていた板橋区赤塚城址でコジャノメを採集したことがある。その時は、擦れた汚いコジャノメを手にして、異常に興奮したのを覚えていて。もっと西の山地なら普通にいるこの蝶も、我がフィールドでは、絶対採れるわけはないという先入観にとらわれていたが、少し見方が変わったかもしれない。そんなこともあり、地味ではあるが、平地のクロヒカゲ、コジャノメには、常に关心を持ってきた。コジャノメは、低地では非常に局所的で稀だが、東京都区内にも現存する生息地があるくらいで、クロヒカゲほどではない。

本誌「寄せ蛾記」60号に、石塚祺法氏の平野部のコジャノメ、クロヒカゲについての報文が掲載された。私も埼玉県の平野部(武蔵野台地)でクロヒカゲを採集・観察しているので、その記録を報告すると共に、平地のクロヒカゲについて、前から気になっていることを、少し考えてみたい。

平林寺境内林

1984年当時、クロシジミを採集したいと思って、関東平野の何ヶ所かを探したことがある。「山渓カラーガイド・日本の蝶」という本に、平林寺で撮影されたクロシジミの写真が出ていたので、「もう15年も前の写真だから、だめかもしれないなぁ」と思いながらも、すでに大宮台地、狭山丘陵で完封負けしていたので、一応行ってみることにした。

平林寺の境内林は、所々にアカマツを交えたクヌギ・コナラ林で、林床にはクマザサが茂っていて少し異様な感じがした。こんな平地林にクマザサなんて初めて見るからである。大発生していたヤマダカラヘハの幼虫が至る所を歩いている。鳥も食わないという大きな毛虫は気持ち悪かったが、境内を一周して見た。まるで奥多摩かどこかの山に来たような雰囲気である。

入口からそんなに歩かないところで、不意に黒い蝶が現れた。クロヒカゲの雌である。一瞬目を疑った。こんな平地にいるとは! 平日で周りに人はいなかったので、思わずクマザサの中に踏み込んで凝視してしまった。雌なので色が薄いが、確かにクロヒカゲである。そのうちに、もっと黒い雄も現れ、確信を持つことができた。誰も見ていないとはいえ、禅寺の境内林だし、採集行為は禁止にもなってい

るので、観察にとどめ、そのまましばらくの間、平地のクロヒカゲを眺めていた。

この日、クロシジミは全く見付からなかったのは言うまでもない。

【データ】 埼玉県新座市平林寺；14-VI-1984；クロヒカゲ 1♂1♀目撃。

新座市本多（野火止用水）の雑木林

1985年6月には、アカシジミなどの平地産ゼフィルスの採集を目的として、平林寺とは関越自動車道を挟んで反対側にある新座市本多を訪れた。野火止用水沿いの一角にあり、この辺りとしては、比較的広い雑木林である。平林寺と似たような環境で、別段変わったところはない。

この年にも大発生したヤマダカラハの幼虫が降ってくる中を、つなぎ竿でクヌギの梢を叩き回った。栗畠のクリの白い花に多くのゼフが訪れていた。夕方になって、黒い蝶がクリの木の周りをかなりのスピードで飛び回っているのに気付いた。「クロヒカゲだ！」そう確信したので、何とか採集しようと試み、ついに1頭のクロヒカゲを採集することができたのである。採集した個体以外にいたかどうかは記憶にない。唯1頭のクロヒカゲは、この日採集したウラナミアカシジミやオオミドリシジミとともに大事に標本箱にしまってある。

【データ】 埼玉県新座市本多；16-VI-1985；クロヒカゲ 1♂採集。

狭山市堀兼の雑木林

1989年、性懲りもなくクロシジミの調査にこの辺りを何度も歩いた。私は車がないので、調査行はいつも徒歩である。それが幸いしたのかもしれない。クロシジミのいそうな「明るい伐採地」といった環境は、鉄塔や送電線の下に多かった。だから送電線の下につけられた道を歩いていくと、偶然、屋間でも非常に暗い雑木林の一角に行き当たった。まるで当然のごとく、そこにはクロヒカゲが飛んでいた。個体数は非常に少ないようだ。しばらく待っているとどこからともなく現れて、また姿を消してしまう。この時は採集はしなかったけれど、クロヒカゲは目に焼き付いている。

【データ】 埼玉県狭山市堀兼；21-VI-1989；クロヒカゲ 2exs. 目撃。

埼玉県でのクロヒカゲの分布は、「埼玉県の蝶類」によると「山地帯では多産し、その下限は長瀬・宝登山あたりで、さらに低い比企丘陵では稀に目撃される程度」であるという。「埼玉蝶の世界」には、「狭山丘陵の東縁から比企丘陵にかけてのラインより西の山地・丘陵地に分布する」という内容が書いてある。しかし、石塚氏の調査によると、「比企丘陵では決して稀でなく、多産する」という。しかも平林寺を初めとして、局所的ではあるが、武蔵野台地で本種が確認されたことによって、クロヒカゲの県内分布に関する認識を少々変えなければならないだろう。

東京都では、長い間、丘陵地を除く市部及び23区内には、本種は生息しないと考えられてきた。文献

上でも、はっきりとしたデータを伴った採集記録は、戦前に新宿で得られた1例（1939年）しか見られなかった。

杉並区高円寺中学校生物部により、まとめられた「南関東の蝶類」は、この地域の蝶相を知る上で古典的な重要文献である。1958年から1962年にかけて1～6巻が刊行されたが、ついにジャノメチョウ科の分冊は発行されなかった。1982年になって青梅市から「青梅の自然Ⅱ」が刊行された。その中で「南関東チョウ類調査資料」として、その未刊の部分が公表されたのである。クロヒカゲの部分を参照すると、国分寺で1頭の採集記録（1956年）がある。

「世田谷の蝶」の著者である福田晴男氏が、「月刊むし 124号」に報告した「東京平地産クロヒカゲ分布の可能性」では、文京区本郷での本種の採集記録（1960～1970年）が6例（！）も公表されている。

その他、武蔵野台地上〔小金井市（1964年）、調布市（1980年）〕での採集記録もある。

さらに驚くべきことに、1980年代に入って、世田谷区内で複数の個体が確認されている（1981～1984年）。以前から不確実な情報はあったようだが、「世田谷の蝶」ではクロヒカゲは疑問種扱いになっている。世田谷区岡本の記録地は、台地・低地境の斜面林で、林床にアズマネザサが茂る暗い環境であり、クロヒカゲの数は非常に少ないようである。

これらの都内での記録は、埼玉県内の武蔵野台地との関連は深いと思われる。

神奈川県では、丹沢・津久井の山地に多産する。多摩丘陵でも普通に産するが、丘続きにもかかわらず、川崎・横浜市街地の中心部に近い地域では、見付からないという。1970年代前半に川崎市の蝶を調査した報告によると、川崎市高津区（当時）の中央部を境にして、それより東にはクロヒカゲが見付からないという。その分布境界をダイアナ・ラインと名付け、何らかの地史的な意味合いがあるとする見方もある。しかし、前述の「南関東チョウ類調査資料」には、横浜の核心部ともいえる横浜市中区本牧で2頭の採集記録（1957年）が記載されている。

これらのほか、特定の地域の蝶のリストに、詳細なデータなしに、クロヒカゲの名が記載されている例がある。これらの記録のうち、いくつかはヒカゲチョウとの見間違いなどの誤報も考えられる。しかしながら、関東の山地・丘陵地には普通に見られる蝶で、見分け方もそれ程難しくない。いくら関心の薄い蝶とは言っても、余程の初心者ならともかく、少し採集経験のある者なら、まず間違えることはないと思う。写真入りで報告されたものや、少なくともデータの伴った採集記録は、信用してもいいだろう。これだけの事実が明らかになってきたのである。単なる偶産ではすまされない。従来分布しないとされていた南関東の平野部にも、本当はクロヒカゲは分布する、と考えるのが自然だろう。低地で採集されるクロヒカゲが、本来の生息地と同様な、比較的自然度が高く、薄暗い湿った林で得られていることを見ても明らかだと思われる。

そうは言っても、まだ疑問が残る。1つは、なぜ今までこの地域でのクロヒカゲの分布が見逃されてきたのか、ということである。自問自答してみると、「普通種であった或いは関心の薄い蝶ゆえ、確実な記録がほとんど残されていなかったのだろう」という答えが出てくる。

「普通種」というのは言い過ぎかも知れないが、それ程珍しくなかったのではないだろうか。普通種であればあるほど、正確な記録がないということは、よくあることである。当たり前のことは、わざわざ書く必然性がないといった具合に。ヒカゲチョウのように今でも確実に見られ、我々が採集することができれば問題はない。しかし、記録にも残されず絶滅してしまったものはどうしようもない。クロヒカゲに限らず、記録に残らず姿を消していく蝶は多い。昔の昆虫雑誌等を見ると、珍稀種や美麗種の報告は、比較的詳細なデータを伴って報告されているが、普通種は無視されているといつても過言ではない。この何十年かの間に著しく変わったとはいえ、どこにでもいた蝶が見られなくなるとは、誰が考えただろう。

もう1つには、同好者の関心が薄かったこともあるだろう。地味だし、場所によっては腐るほど見られる蝶である。クロヒカゲなんかいても採集するわけでもなく、記録に残すわけでもない。ただ、時が経ってみたら、いつの間にか絶滅していた、ということかもしれない。

正確な記録が残っていれば、後から検証することが可能だが、人間の記憶に残っているだけなら、単なる噂話と変わらなくなってしまう。この場合、人々の記憶にすら残っていなかつたようだ。

また、現在の南関東でのクロヒカゲの分布成因には、

1. 都市化などによる高自然度の緑地の分断等人为的影響
2. 海進・海退等地史的な影響

という2つの要因が考えられるが、この問題にも非常に興味がある。

人为的影響については、疑う余地はなく、当地域でのクロヒカゲの分布に大きな影響を与えたことは明白である。この地域からクロヒカゲがいつ頃、どのようにして、どういう原因で消えていったのかという疑問も当然わいてくる。その答えは、経過を見ることができない以上、正確に知ることは難しい。ただ、植生の変化（破壊）と関連させて、間接的に追うことは可能である。

地史的影響については、過去の文献の調査及び現在武蔵野台地等の低地に散在すると思われるクロヒカゲの生息地の詳細な調査をし、分布の実態を掴むことが先決であろう。勿論、完全な沖積低地からは記録がないわけだから、ある程度の地史的影響は受けていると考えられるが、事実に基づいた検証を経た上でなければ、結論に達することはできない。

本当は、これらの疑問に答えるべく、色々検証して見たいのだが、無知な上に不勉強で、とてもそれだけの論陣を張るだけの力量もなく、手に負いかねる。独断と偏見に満ちているが、「平地のクロヒカゲ」に関する自分なりのイメージは確認できたつもりでいる。

首都圏の開発は、まだまだとどまるところを知らない。誰にも知られていないクロヒカゲの生息地が、誰にも知られずに消えているかもしれない。武蔵野台地では、ここ数年クロシジミが採集されていることもあって、結構多くの人が入っていると思われる。この時期は、クロヒカゲも発生しているので、確実に採集・目撃した方は、ぜひ報告していただきたいと思う。

(引用及び参考文献)

- 市川和夫・原 聖樹 (1978) 埼玉県の蝶類; 埼玉県動物誌 p. 259~298 埼玉県教育委員会
 埼玉昆虫談話会編 (1984) 埼玉蝶の世界; 埼玉新聞社
- 渋谷 誠 (1974) じゃのめちょうのいる町 川崎の蝶, 1974年の調査報告; 神奈川虫報45:123~149 神奈川昆虫談話会
- 須田孫七 (1982) 青梅市の昆虫; 南関東の蝶類調査資料;
 青梅市の自然II p. 436~492 青梅市教育委員会
- 福田晴男 (1981a) 世田谷の蝶; 自刊.
- 福田晴男 (1981b) 東京平地産クロヒカゲ分布の可能性; 月刊むし 124:8~9 むし社.
- 石塚禎法 (1991) 武蔵野の雑木林の衰退と蝶の変遷 (1);
 寄せ蛾記 60:1124~1134 埼玉昆虫談話会.

(たなか つよし 〒114 北区王子 6-2-3-201)

■■■■■ 破風山でダイミョウヒラタハナバエを採集 ■■■■■

南部 敏明

本誌60号に玉木氏が解説されているダイミョウヒラタハナバエを、皆野町破風山で採集したので報告する。

1♂ 12-V-1992 皆野町破風山 水潜寺より山頂へ登る中腹で、地上2メートルほどの葉上に止まっているのを採集した。

(なんぶ としあき 〒369-12 大里郡寄居町桜沢 2397-2)

■■■■■ 北本市でムラサキシジミを採集 ■■■■■

磯野 治司

筆者は、本県平野部では記録の少ないムラサキシジミを、北本市内で採集したので報告する。

採集個体: ムラサキシジミ 1♀ (越冬後の個体と思われる)

採集地: 北本市高尾

採集日: 1992年4月26日

採集者: 磯野治司

(いその はるじ 〒363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A202)

.....

音楽の中の虫たち（4）

碓井 徹

.....

今回は、1ヵ月後に開幕するバルセロナ・オリンピックを記念して、スペインもの、それも彼の地の国民的楽器ともいべきギターのための曲を2つ紹介するという大サービスである（ただのミーハー的迎合に過ぎないとも言えるのだが・・・）。

実は、前号63号の『ミドリシジミ特集号』でも、本連載でタイムリー・ヒットを放つべく“ミドリシジミ”あるいは“ゼフィルス”に関する音楽を探してみたのだが、ついに見つからなかった。ギリシャ神話から題材をとった詩をテキストにした歌曲や、それらをモチーフにした器楽曲には“西風”や“西風の神”としてのゼフィルスは登場して来るのだが、残念ながら蝶の“ゼフィルス”は、今まで音楽の世界には登場していないようだ。

◆ La Mariposa (蝶々)

La Mariposa

6^a en Ré F. Tárrega

Allegro vivace

◇ 作曲：Francisco Tárrega (1852-1909)

◇ 楽譜：La Mariposa (初出版は、1902年に Antich y Tena が刊行した第一曲集に掲載された)

◇ 録音：ターレガの作品集のCDが発売されているので、その中に収められているかもしれないが、未調査。ターレガの作品の中では、あまり演奏されることの多くない曲だと思う。

☆【作品について】作曲者フランシスコ・ターレガ（または、タルレガ）は、現在のクラシックギターの演奏法を確立した、いわば『現代ギターの父』とも言うべき存在である。1878年にバルセロナで第1回の演奏会を催して以来、1909年にバルセロナで没するまで、ヨーロッパ各地で演奏会を開いて好評を博す一方で、ギターのために数多くの名曲を書き残した。とりわけその中でも、トレモロの美しい『アルハンブラ宮殿の思い出』は特に有名である。

本曲“蝶々”は、それらの名曲の陰に隠れて、なかなか演奏される機会の少ない小品であるが、ご覧のように、蝶の舞翔ぶ姿を彷彿とさせる音形の軽快な曲。上掲の楽譜は、現代ギター社刊『ターレガギター曲集 オリジナル篇II 中野二郎 監修』によった。

◆ EL ABEJORRO -Estudio-

(熊蜂-練習曲-)

EL ABEJORRO

ESTUDIO

EMILIO PUJOL

Vivace

◇ 作曲: EMILIO PUJOL (1886-1980)

◇ 楽譜: EL ABEJORRO -Estudio-, RICORDI AMERICANA, Buenos Aires (CASA DE LA GUITARRA, Tokyo)

◇ 録音: 本曲は、映画『禁じられた遊び』の音楽をギター1本で担当したスペインの名ギタリスト、ナルシソ・イエペスのアンコール・ピースとして世に知られるようになつた小品で、イエペスのCDやLPの幾つかに、その快演を聴くことができる。

☆【作品について】作曲者エミリオ・プジョール（または、プホール）は、今世紀初頭のバルセロナで、先に紹介したF・ターレガに就いてギターを学んでいた。プジョールは、ギタリストとしても活躍していたが、現代のギター界では、一般的には、16世紀スペインのビウェラ（ギターに似た楽器）音楽の研究者として、そして、ギター教育家・編曲者としての名声がより高いように思える。

本曲も『練習曲』と付いているように、ギターのための曲を多数書いてはいるものの、規模の大きな曲は少なく、その作品にはギター演奏のための教育的な意図を含んだ小品が多い。むしろ、16世紀スペインの器楽曲から20世紀のファリャのオーケストラ曲に至るまでの、守備範囲の広い編曲によって、ギター愛好家にその名を知られている。

本曲の題名“EL ABEJORRO”は、ギタリストの間では『くまんばち』と訳されているが、雑誌“現代ギター”1981年4月号（プジョールの追悼特集号）で、浜田滋郎氏は『〈アベホーロ Abejorro〉とは、とくに熊蜂に限らず、スズメバチでもカナブンでも、ぶんぶん鳴りながら飛ぶ大きな虫のことだという』、と述べている。曲は、ご覧のように短2度の響きで羽音と模したアルペジオの練習曲で弾いていて小気味のよい曲である。楽譜は、リコルディ社から1955年に出版されているが、上掲の楽譜は、本曲の日本での版権を持つ、東京自白のギタルラ社の版によつた。

なお、雑誌“現代ギター”1981年4月号に掲載されているプジョールの全作品リストを読んでいたら、“La libelula (étude) -トンボ- (練習曲)”をいうのがあった（ウーム、見落としていた…）。また入手すべき楽譜が増えてしまった。実は、“トンボ”的曲は、これまでに紹介した3曲の他にも、プジョールのものもいれるとあと4曲ほど存在をつかんでいる。楽譜が手に入りしだい紹介したい。

狭山丘陵のオオムラサキ

中川 稔勝

1957年10月の日本昆虫学会40周年記念大会のおりに、わが国の「国蝶」に指定されたオオムラサキは、アジア特産の美しい大型のタテハチョウである。かつて、武蔵野の雑木林の夏の風物詩であったこの蝶は、1960年代から雑木林の減少とともに、関東平野の各所でつぎつぎと姿を消してしまった。宅地開発、観光開発、あるいはゴルフ場開発等により、雑木林が伐採され、あたかも生息地の雑木林の規模縮小に比例するかのように、オオムラサキも減少しつづけているのである。

現在、オオムラサキの保護育成に力を注いでいる武蔵嵐山の「オオムラサキの森」周辺部をのぞけば、JR八高線以東の低地でこの蝶を見ることは、よほどの幸運に恵まれないかぎり難しいのではないだろうか。

筆者は、JR八高線の東側としては、数少ないオオムラサキの観察地である狭山丘陵において、1990年、数回におよぶ調査を行い、若干の採集記録あるいは目撃記録を得ることができたので、この場を借りて報告したいと思う。さらには、これを機に、多少なりとも都市近郊に位置する狭山丘陵のオオムラサキにも目を向けていただけたりしたら、これに過ぎるよろこびは無い。

1. 狹山丘陵におけるオオムラサキの記録地

ここに改めて説明するまでもなく、狭山丘陵は、狭山湖、多摩湖を中心に、東京都は西多摩郡瑞穂町、武蔵村山市、東大和市、東村山市から、埼玉県は入間市、および所沢市を含む広大な水源涵養林から成り立っている。近年、開発の影響を受けつつはあるものの、都市近郊としては、第一級の自然が残されており、オオタカの生息地としても著名である。また、最近では、1955年（昭和30年）頃を背景に描かれた、アニメ映画の秀作、「となりのトトロ」の舞台としても脚光をあびている。

筆者の、1990年狭山丘陵におけるオオムラサキの記録地は、以下のとおりである。

【東京都側】

- 1♂（汚損） 東京都西多摩郡瑞穂町 5.VII.1990
- 2♂♂（目撃） 東京都武蔵村山市本町 5.VII.1990
- 1♀（目撃） 東京都西多摩郡瑞穂町 31.VII.1990
- 1♀（目撃） 東京都武蔵村山市岸 31.VII.1990

【埼玉県側】

- 1♂（汚損） 埼玉県所沢市勝樂寺 31.VII.1990

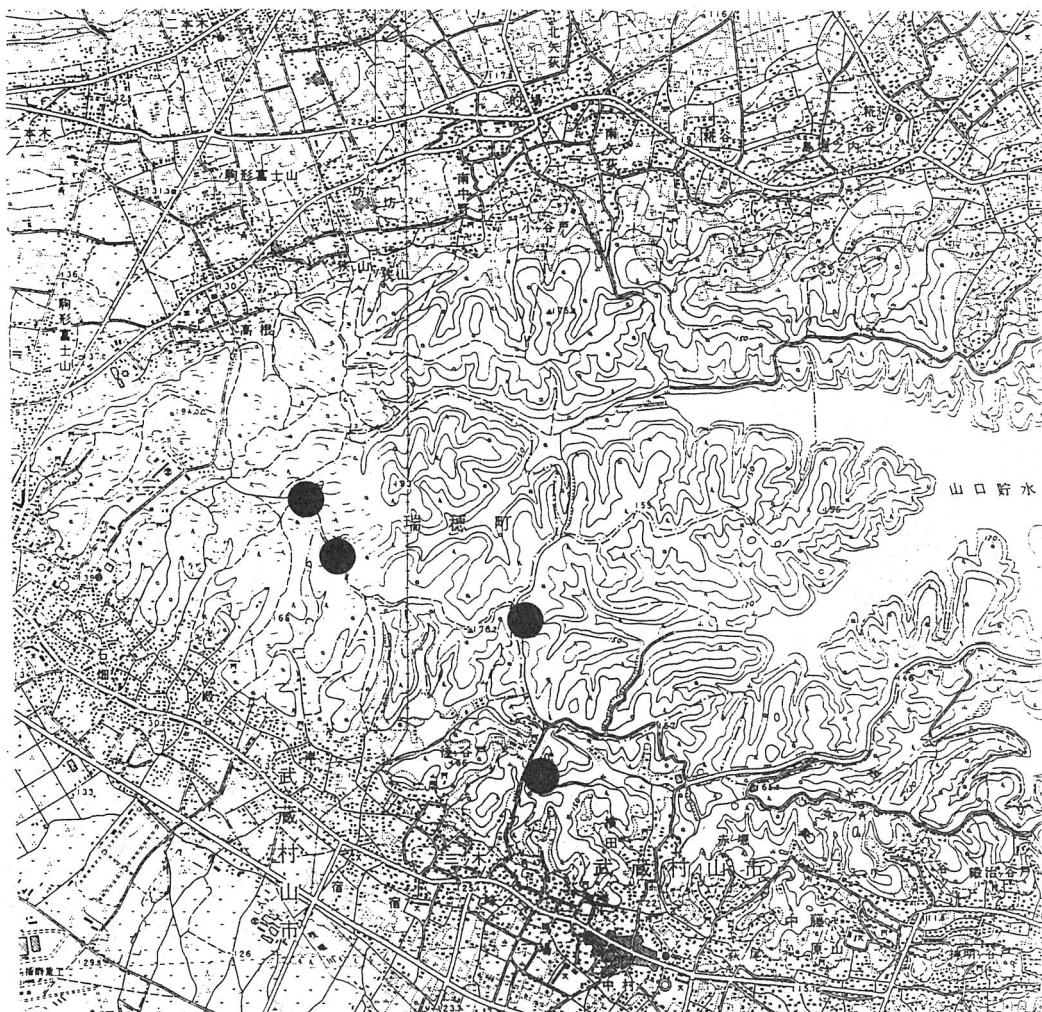
1990年現在、狭山丘陵でオオムラサキが比較的よく観察できる地域は、やはり狭山湖の西側と思われる。筆者においては、東京都下西多摩郡瑞穂町六道山山頂部、武蔵村山市本町の野山北公園入り口の遊

歩道沿の等が、主なオオムラサキの観察ポイントであった。このほか、埼玉県の入間市側にも良いポイントがあるといわれている。

武藏村山市本町のポイントでは、夕刻、複数の♂が樹上高くテレトリーをつくり、追飛行動をとっている姿も観察できたが、いずれの地でも、成虫の数は少ない。

因に、過去においては、埼玉昆虫談話会が、早稲田大学の所沢キャンパス進出計画を契機に、1983年、狭山丘陵の一郭である所沢市三ヶ島地区において、昆虫調査を行っている。この時まとめられた「所沢三ヶ島の昆虫調査報告」によれば、オオムラサキに関しては、過去の記録はあるものの、確認には至っていないという。

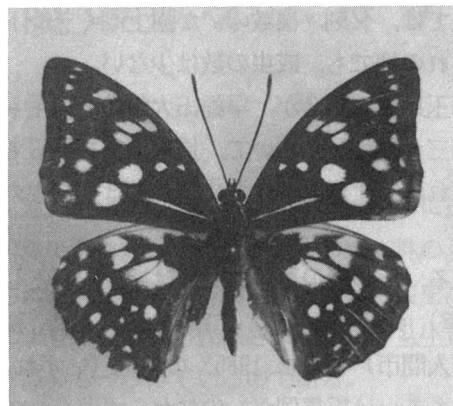
狭山丘陵の埼玉県側における、その後の目撃あるいは採集記録としては、1ex.（目撃）所沢市三ヶ島 14.VII.1985 : 1ex.（目撃）所沢市三ヶ島 3.VIII.1985 : 1♂ 狹山湖林道（入間市） 14.VIII.1985 : 1♀（目撃）狭山湖林道（入間市） 24.VIII.1985. の4例（いずれも杉村）がある。但し、これら以外にも、未発表を含む目撃、あるいは採集例が、少なからず埋もれているもと推測される。



● オオムラサキ記録地点

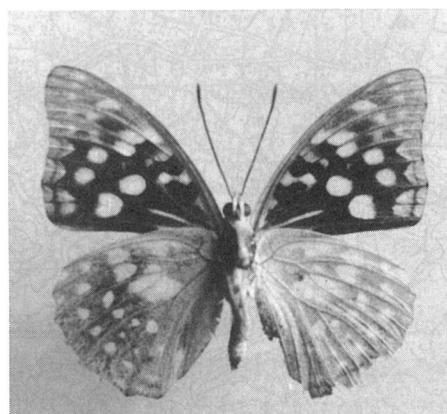
所沢市勝楽寺産

♂



同 裏面

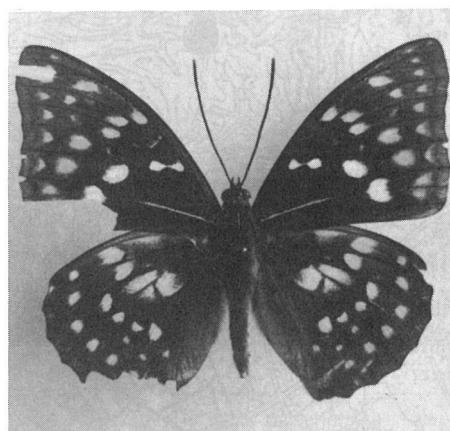
モノクロのため判然と
しないが、裏面はかな
り白化傾向の強い個体
である。



西多摩郡瑞穂町産

♂

大型の個体である。



狭山丘陵の東京都側においては、狭山湖をとりまく瑞穂町をはじめ、武蔵村山市、東大和市等、埼玉県側とくらべると、比較的記録の集積も多いものと思われるが、筆者においては、詳細について未確認のため、個々のデータについてはここでは触れない。

2. 観察地における課題

オオムラサキは、元来、近縁のゴマダラチョウとは異なり、その生息地の条件として「広い雑木林」が必要である。ゴマダラチョウが、エノキを雜えた都市部の小さな林でも、世代交代をくり返せるのに対し、オオムラサキは、より行動範囲が広く、大きなハネで自由に滑空旋回できる空間、すなわち広い雑木林が必要なのである。この「広い雑木林」の必要性は、成虫の場合のみならず、越冬期における幼虫の場合にもあてはまる。食樹であるエノキの大木を混じえた広い雑木林は、乾燥に弱いオオムラサキの越冬幼虫が乾燥しがちな厳冬期を無事にすごすためには、必要な条件と考えられるからである。それと、いわゆる深山幽谷のそれではなく、生活の拠点はあくまで人里近くの雑木林－背後に「山」をひかえているような場合が多い－である。このことは反面、人里近いがゆえに、開発等の人為的影響を受けやすいという難点もあわせもつ。

さらに、いまひとつ重要な条件としては、大きな体を支えるための、必要にして充分な「吸汁源の確保」がなされなければならない。話は少しそれるが、オオムラサキが平野部で衰退しているのに対し、ゴマダラチョウが生き残っている理由は、ここにあるといわれている。すなわち、ゴマダラチョウは、一般に、オオムラサキよりは食性が広いとされ、吸汁源である樹液への依存度も低いと考えられているからである。だからこそ、クヌギやコナラを混じえた雑木林の規模が縮小し、結果として、樹液の供給量がおちたとしても、オオムラサキほどの死活問題にはならないであろう。いずれにしても、オオムラサキにとっては、樹液を主とした吸汁源の確保は、彼等が活動する上で、必要不可欠な条件であることにかわりはない。そして、これまで述べてきたように、「広い雑木林」の存在と「吸汁源の確保」という二つの条件が満たされなければ、オオムラサキの生息地における繁栄は、あり得ないといって過言ではない。

この「吸汁源の確保」ということを考えた場合には、生息地の雑木林の適度な伐採も必要となってくる。かつては、平地、あるいは丘陵地の雑木林を形成していたクヌギやコナラ等の二次林は、ある程度成長すると、燃料用の薪炭材として、あるいはキノコ栽培用にと、枝打ち伐採が行われてきた。これにより、林内は適度に明るく若木の発育も促され、樹液の供給量も多かった。しかし、現在では、これらの二次林の、とりわけ燃料としての需要は極端に減ってしまい、不必要になった雑木林は宅地化のために全面伐採が行われてしまったり、あるいはまったく逆に、適当な手入れもなされないまま、大木化して、樹液の供給量の少ない暗い林に移行したりするケースが多い。いずれの場合も、充分な吸汁源の確保という観点からみると、到底期待はできない。尚、この辺の事情については、牧林功氏の著書「雑木林の小さな仲間たち－狭山丘陵昆蟲記」にも詳しく紹介されている。

さて、ここまで述べてきたことからもわかるように、オオムラサキの生息地において要求される二つの条件は、狭山丘陵においても、当然、要求されるべき課題となってくるのは言うまでもない。私見になるかと思うが、自然公園である狭山丘陵は、広い雑木林の確保という点からみると、開発による環境悪化も危惧されるものの、各種の森林保護運動の成果も出てきており、大筋においては当面問題はない

ものと思われる（むしろ、丘陵を取りまく周辺部の環境悪化から、オオムラサキの生息環境におよぼす影響が懸念される）。しかしながら、吸汁源の確保という点においては、筆者の狭い範囲での観察からは、断定できないまでも必ずしも充分であるとは言いがたいのが現状ではなかろうか。

3. 狹山丘陵とオオムラサキ

狹山丘陵のオオムラサキは、愛好者の間では古から知られ、人気が高い。山地で得られる個体にくらべ、関東平野周辺部の低地産オオムラサキは、個体差はあるものの、比較的大きな個体が多いというのも魅力のひとつらしい。しかし、残念なことに、この狹山丘陵のオオムラサキも、減少傾向には歯止めがかかからず、丘陵全域で広く見られるにもかかわらず、その数は、かろうじて種を維持するに足る、必要最小限度の個体数でしか見あたらない。それでも、武蔵野の低地で、オオムラサキが見られなくなってしまった現在、都市近郊に位置しながらも、オオムラサキの雄姿が観察できるこの狹山丘陵の存在意義は極めて大きい。その意味からも、この数少ないオオムラサキが生息する良好な環境を、いつまでも残しておきたいと思う反面、緑の孤島、狹山の森に古くから棲む、彼等の行く末が案じられてならないのも、また事実である。

【参考文献】

市川和夫・原聖樹 (1978) 埼玉県の蝶類 埼玉県動物誌 ; 286.

埼玉昆虫談話会 (1984) 所沢市三ヶ島の昆虫調査報告 寄せ蛾記 増補2.

牧林功 (1985) 雜木林の小さな仲間たち 狹山丘陵昆虫記.

杉村健一 (1986) 1985年の狹山丘陵の蝶 寄せ蛾記46 ; 649.

市川和夫 (1990) 狹山丘陵の昆虫 関東地方の台地、丘陵地を代表するチョウ相

日本の生物 4(4) ; 30~35.

所沢市 (1991) こんなところにこんな生きもの 所沢の自然.

中川利勝 (1991) 埼玉県産蝶類記録 (2) 寄せ蛾記(62) ; 1208.

註 目撃記録ではあるが、筆者は1991年8月3日所沢市堀之内において、林の向こうへ飛び去るオオムラサキ (1 ex.) を確認しているので付記しておく。また、所沢市三ヶ島地区においては、オオムラサキ保護の一環として、現地で越冬幼虫を採集飼育し、成虫になった時点での放蝶が行われているという話もある。

石戸宿、その後(2)

碓井 徹

はじめに

本誌62号の連載第1回(碓井, 1992. 以下『前報』)は少々長くなってしまったが、お読みいただいだ方々から少なからぬ反応があり、当地の昆虫相・生態系・公園化などについて、多種多様な視点の存在を改めて確認しながら意見交換をすることができたことは、予想していなかった喜びである。別刷を送付した県自然保護課と大宮公園事務所からは公式の返信はなかったが、これは当初から期待していなかったこと。会員外の方も含め、北本市石戸宿を色々な立場から眺めている人々と、当地の自然環境について論ずる機会が持てただけでも、この連載を書き始めてよかったと思っている。

なお、前報は『寄せ蛾記62号』の巻頭をデーンと飾ってしまったために、そこに書かれていることが、あたかも“埼玉昆虫談話会”としての主張のように受け取られた面があるようだが、この連載の中で筆者が述べていることのすべてが、あくまで筆者の個人的な意見・考察であることを、ここで明記しておきたい。連載第2回は、まず前報の訂正から。

1. 前報の訂正

前報の中で、筆者の事実誤認による見当違いの記述があったので、それらを訂正しておく。

まず、前報の‘はじめに’で、北里メティカルセンター北側の湿地の埋立について『駐車場にするためにすでに埋め立てられ…』と書いたが、これは筆者の事実誤認で、実際のところは、『県がこの土地を取得する以前に、土地の所有者が産業廃棄物業者に残土・汚泥捨て場として利用させた』ということとの指摘があった。お詫びして訂正したい。

また、「3. 北本市石戸宿のトンボ相について」では、いずれも目撃例しかないと書いたアオイトトンボとオオヤマトンボについて、採集例があるとのことである。これも訂正したい。この2種の具体的な採集記録は、本誌にいずれ発表されることと思う。

その他、知見の整理の項の中で見落とした文献があるようだが、今回はページも限られているので、前報以降の新知見の紹介も含めて、知見の整理は次回に先送りすることにした。

2. 県立『北本自然観察公園(仮称)』について

前報執筆段階では、公園化に向けての整備事業は自然学習センター建設工事以外はさほど目立つものではなかったが、今春より、同センターの周辺を中心にあちこち掘り返したり、水路を変えたりと、一気に『自然を観察するための公園化』事業として、貴重な自然を壊し始めた(写真1~3)。また、7月1日に同センターがオープンするということで、県が作成したカラーのパンフレットが出回ったり、同公園に関するマスコミ報道も目立つようになり、筆者はそれらを読むことで、ようやく同公園の計画の全体像がおぼろげながら見えてきたような気がしている。

写真1. 自然学習センターから見下ろせる
の南西側の湿地をブルトーザーが掘り返し、湿性植生はかなり
のダメージを受けている。ここには《高尾の池》というのが
出来るのだそうだ。



写真2. 休憩所から西へ延びている遊歩道は拡張工事を受けている。遊歩道沿いに
あったヤナギの灌木は切られ、水路は潰され、湿地はブルトーザーで搔きまわさ
れている。

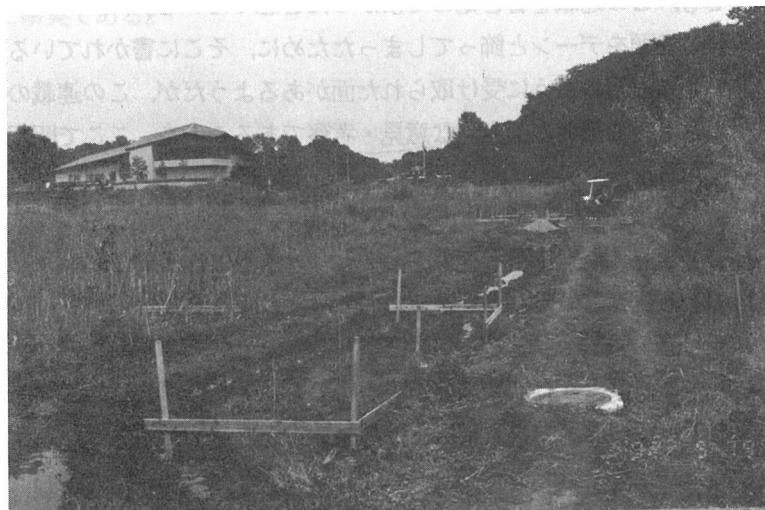


写真3. 自然学習センターの北東側にある
谷戸にもブルトーザーは入り込んでいた。
ここは、計画では《ほたるの谷》と呼ばれる
のだそうだ。



さて、前報で筆者は、同公園に関して以下の3つの提言をおこなった。

- ① 広大な開放水面を持つ池の造成は、絶対おこなうべきでない。
- ② 現在の水域環境保全のために、特に当地の乾燥化を防ぐ対策を早急に講ずるべきである。
- ③ 『自然観察公園』の名の元に、動植物を採集禁止にするのは反対である。

現在でも、もちろんこの3つの提言について基本的な考えは変わっていないが、今回は、これらの主張のうち、池の造成の問題について詳しく論じてみたい。

1) なぜ池が必要なのか。－自然観察公園にとって、この池の果たす役割は何なのだろうか－

貴重な湿性環境が当地に存在すること、特にそこに生息している水生・半水生の昆虫には、環境庁が刊行した所謂“レッドデータブック”にも含まれているきわめて重要な種が4種も含まれていること、は前報に書いた。そして、心配していたとおり、県が作った同公園のパンフ“北本自然観察公園”には、前述の自然学習センター横に《高尾の池》，休息所から桜堤下部・一夜堤まで広がる広大な《石戸池》が描かれている。ここでは、貴重な昆虫相の保護を再度訴えつつ、『なぜ、当地に大きな開放水面を持つ池を造成しなければならないのか、誰がそうしたがっているのか？』について考えてみたい。

A) バードサンクチュアリ構想の中で－(財)埼玉県生態系保護協会に期待する－

当地の自然環境のすばらしさが客観的に評価されたのは、埼玉県がおこなった“埼玉県バードサンクチュアリ”を整備するための候補地選定の作業の中で、見沼田圃の〔川口市差間〕・高麗の里の〔日高市巾着田〕と共にこの地が候補地として選ばれたことが最初であろう。この“埼玉県バードサンクチュアリ”構想の基礎調査は、県が“日本野鳥の会 埼玉県支部”に依託したもので、同会は〈埼玉県バードサンクチュアリ 基礎調査報告書 B5版 pp.228〉という分厚い冊子を1984年3月に出している。内容は、上記3地域の社会環境と自然環境(動植物のリストも含む。北本市石戸宿の昆虫関係ではチョウ類44種、トンボ類18種を含む約200種がリストアップされているが、データはついていない。)について、バードサンクチュアリ設置を意識した評価を下し、サンクチュアリとして整備するためのいくつかの提言をおこなっている。その中の北本市石戸宿に関する記述中、〈2. 自然環境調査 (4)鳥類調査 2)調査結果 イ 潜在鳥相の推定と誘致目標鳥類の選定 (イ)誘致目標鳥類の選定と環境造成上の提言〉の項に以下のような記述がある。少々長くなるが引用する。『…(前略) 池沼環境について述べると、現在調査地内で広がりのある水面は、カツツブリ・バン(各1ペア程度)が繁殖している堤防外の荒川河川敷のみである。農事試験場跡地の北側の谷地に、池沼の造成を図ることが望まれる。池沼の造成は、水辺環境が多様化し、繁殖鳥の増加が期待できるのみならず、景観的な意味からも石戸宿サンクチュアリを印象付けるアクセントとしての有用性が高い。また、冬期は観察効果の高い多くのカモ類、さらにガン・ハクチョウ類等の渡来も十分期待できる。現在でも、この谷地は年に1～2回、降水量が多いと自然に池沼状態となっており、その造成は容易と思われる。森林に囲まれ、池や湿地が配置する将来の石戸宿サンクチュアリは、40種程の野鳥が繁殖し、かつて身近に見られた埼玉県平野部の豊かな自然環境(生態系)がそのまま恒久的に保全される場所として最もふさわしい。また、多くの県民に対して自然のやすらぎの場、そして自然観察の教育の場とし

ての提供が可能な恵まれた資質を持った場所と言えるであろう。』。

筆者はこの記述に関して、『野鳥愛好家がバードサンクチュアリを作りたがっている』という視点で見れば、何の問題もない表現なのだと思う。しかし、現在の北本市石戸宿で作り出されようとしている“北本自然観察公園”に対しての提言と仮定して読み替えた場合には、これを『野鳥愛好家の発言だから・・・』で済ませるわけにはいかない。

この調査を依託され報告書を作成した“日本野鳥の会 埼玉県支部”は、この報告書を出した直後に“日本野鳥の会 埼玉県支部”と“(財)埼玉県野鳥の会”にわかれ、“(財)埼玉県野鳥の会”は今春（1992年4月）から“(財)埼玉県生態系保護協会”と名称を変更している。そして、この報告書の巻末に記述されている報告書作成スタッフは、その後の“(財)埼玉県野鳥の会”的メンバー、すなわち現在の“(財)埼玉県生態系保護協会”的メンバーになっているので、この報告書は“(財)埼玉県生態系保護協会”とは無縁のものとは言えないであろう。実際、同協会の会誌である〈ナチュラルアイ〉の1992年6月号は同公園についての特集記事を組んでおり、その中でも、“埼玉県バードサンクチュアリ”構想から“北本自然観察公園”に至るまでの様々な局面で、同協会がこの地と少なからず関わりがあったことが明らかにされている。

8年前に調査報告書がまとめたこの“埼玉県バードサンクチュアリ”構想は、候補地を北本市石戸宿に決定しつつ、コンセプトが県営“自然学習公苑”構想へと変化し、それが現在の“北本自然観察公園”となって具体化しているのであるが、果たして、この『農事試験場跡地の北側の谷地に、池沼の造成を図ることが望まれる。池沼の造成は、水辺環境が多様化し、繁殖鳥の増加が期待できるのみならず、景観的な意味からも石戸宿サンクチュアリを印象付けるアクセントとしての有用性が高い。』という提言は、いまだに生きているのだろうか？はたまた、“バードサンクチュアリ”が“自然観察公園”とコンセプトを変えた時点で葬り去られたのだろうか？

前述したように、この提言が『野鳥愛好家によってなされた、バードサンクチュアリのための』ものならば、虫屋の筆者としては、『どうせバードウォッチャーにとっては、アメンボやゲンゴロウの生息環境など、どうでもいいことなのだろう』というお馴染みの台詞を口にしながら、少々淋しげな微笑みと共に許してしまおう。しかし、この自然観察公園について県と打ち合わせをおこなっている(財)埼玉県生態系保護協会が、このような提言を相変らず打ち出し続けているのだとしたら、当地の湿性環境の保全を強く訴えたい筆者としては、黙ってはいられない気持である。勿論、そうでないことを、切に願っているのであるが。

前掲の〈ナチュラルアイ〉1992年6月号では、県が作成した同公園のパンフレットから転載したと思われる同公園の全体平面図（高尾の池と石戸池がバッチリ描かれている）が掲載されているが、そのページの余白に『この平面図は、以前埼玉県が公表した案ですが、本会では自然保護の観点から何点かの見直しを求めています。』と、書かれている。この“見直し”が、どのようなものかは具体的に書いていないが、筆者としては、同公園の整備計画に関して、行政レベルに直接意見を反映させることができる自然保護系の団体は恐らく同協会だけであろう、という判断の元に、『良好な生態系の保全を図る』ことを標榜している同協会には、『石戸池は不要である。現在の湿性環境を保全する努力をすべきである・・・』という意識を期待している。このことについて後述する。

B) 行政の立場から 一金がたくさん使うのがよい仕事なのかー

筆者は、行政の内容にはたいへん疎いので、相当見当違いのことを述べてしまうかも知れないが、行政側から同公園を眺めた場合、素人考えながら、池を作る理由がいくつか見えてくるような気がする。

まず、最初に思いつくのは、『現在の湿地を良い状態で保全して、一見何も手を加えていないような印象を住民に与えるよりは、こぎれいな水辺を造成した方が、いかにも“良い雰囲気の公園を作りました・・”とアピールできる』ことである。これは、前掲のサンクチュアリの報告書の中でも書かれているように、『・・・池沼の造成は、（中略）・・・景観的な意味からも石戸宿サンクチュアリを印象付けるアクセントとしての有用性が高い。・・・』ということでもある。確かに、グチャグチャした湿地よりは、雑木林が緑を落とす水面を作つて『素敵な水辺』を演出した方が、行政にとって『皆様の税金でこんなに素晴らしい公園ができました。行政は、これだけ緑と水を大切に考えています！』と、胸を張つてアピールするのに好都合であろう。しかし、ここは単なる都市公園ではなく『自然観察公園』なのだ。行政の担当部署は、この地の湿性環境がいかに重要なものなのかをしっかり認識するとともに、同公園を利用して“自然を学習する”子供達にどんな“自然”を観察させたいのか、もう一度じっくり考えてほしいものである。

もちろん、この公園に“自然風味の人工環境を造成する”計画を行政が見直すならば、筆者としては、『一見何もしていないように見えて、実は貴重な湿性環境を保全するための整備事業をおこない、一般の人々にアピールしにくい分野にもお金を使った行政の見識』を高く評価する視点を、様々な機会を通して一般の人々に知つてもらう努力はしたいと思うし、本当の自然保護行政とはそのようなものであるべきだ、というアピールは、自然保護に携わる組織や個人も今後どしどしおこなっていく必要はあるだろう。

さて、次に筆者が思いつく、行政が“池を造る理由”は、『池を掘った方が金が動く』という、かなり現実的な事柄である。北本市石戸宿の貴重な湿性環境をブルトーザーで掘り返して池を2つ造ることでどれくらいのお金が動くのか、筆者には皆目見当がつかないが、少なくとも、『金が動かないよりは動くほうが良い事業である』という感覚（事情？）を、行政は持っているだろう。このことは筆者の一方的な思い込みかも知れないし、そうであつてほしいとも思うが、現在の湿地に対して『以前と何も変わっていないようにみえる整備事業』をおこなうより、『ガツガツと掘り返して池を造成する』方が、“好ましい事業”であるという行政の都合があるように思えてならない。

C) ここは、“ビオトープ”見本会場なのだろうか

最近、県はしきりに『ビオトープ』と言う言葉を使つたがっている。この言葉の火付け役?となつた(財)埼玉県生態系保護協会の会誌〈ナチュラルアイ〉1992年5月号もビオトープの特集である。この言葉に関する詳しい説明は避けるが（興味ある方は、“ビオトープ 緑の都市革命、(財)埼玉県野鳥の会 編、発行 きょうせい”という本を参照されたい），最近、しきりに県が使つてゐる“ビオトープ”という言葉は、これまでの開発で自然環境が失われてしまった地域や環境に対して、自然環境を復元するための事業をおこなつて、潤いのある自然環境を創造しよう、というまことに結構な内容のものらしい。しかし、県が声を大にして言うところの“ビオトープ”

からは、本来その言葉が包括しているはずの『自然環境の保全』という、とても大事な部分が伝わって来ないのだ。最近あちこちで耳にする“ビオトープ”という合言葉が、どうしても『新規事業としての自然風味の人工環境造り』のように聞こえるのは、筆者の不勉強のせいであろうか。ともあれ、新規事業として金が動く上に、『環境問題』という言葉がクローズアップされている世情の中で、自然保護・環境問題に力をいれているポーズを広く県民にアピールすることができるこの言葉は、行政にとって“渡りに舟”的キーワードであることは間違いかろう。勿論、荒れ果てた人工環境に緑を導入して多様な生物相の定着をはかる、という基本理念を筆者は否定する気は毛頭ない。それ自体はたいへんすばらしいものであると思う。また、開発を行う際に、自然環境を出来る限り保全するような工法を導入することを心掛ける行政の姿勢も大いに評価できるものであろう（これらの施工の実例は、次の本に豊富な写真で紹介されている。“まちと水辺に豊かな自然を－多自然型建設工法の理念と実際－、（財）リバーフロント整備センター編集。発行 山海堂”）。他の都道府県に先駆けて、県庁内に“ビオトープ創造庁内推進会議”という全庁的な連絡会議を設置（1992年6月26日付、埼玉新聞による）した埼玉県の環境行政の先進性も高く評価されるものであろう。確かに、荒廃している人工環境やこれから計画されている開発事業に“ビオトープ”を導入することは良いことだとは思う。しかし、それとともに自然保護行政が早急におこなうべきことは、現在の埼玉県、それも特に平野部に点在している小規模ながらもまとまった自然環境の重要性をしっかり認識し、『保全すべき自然環境の現状を詳細に把握して、それを良い状態のまま保全することに最大の努力をはらう』という作業ではないのだろうか。県内各地の市町村では、ブームのよう自然環境調査がおこなわれたり、いわゆる市町村史；自然編の刊行が相次いでいる。しかし、それらの調査には、いい加減なものも少なくないことを、当会会員をはじめとする多くの虫屋は知っているであろう。『税金を使って見栄えのよい形になればそれでよい、内容は二の次。』式の、おなじみの行政のポーズがブンブンと匂って来る報告書や刊行物がいかに多いことか。わずかな調査日数と密度の薄い調査結果（そして、それに含まれる怪しげな同定結果・・・ムッ、これはタブーかな）、実際の調査データより文献から拾い集めた古いデータが大きな顔をしている報告書・・・。足元にわずかに残されている貴重な自然環境を、いったいどれだけ多くの行政が緻密な調査をおこなって把握しているのだろうか。失ったものを疑似的に復元することを最優先する前に、失ってはいけないものをしっかり保存することに、もっとエネルギーを使うべきではなかろうか。本来、自然保護行政にとって基本であるべきはずのその作業を怠り（あるいは適当な事業でお茶を濁し・・・），イメージばかり優先させたアピール度の高い軽はずみな（そしてお金だけはしっかり使った）自然保護・環境関連の事業にばかり目を奪われてはいないだろうか。

さて、“ビオトープ”という言葉が呪文のようにあちこちで唱えられ始め、“北本自然觀察公園”の整備事業も派手に開始されたこの時期、この地で“ビオトープ”事業をやると、宣伝効果としてはとても高いものがあるのではないかと、“ビオトープ”に熱心な埼玉県の出方を、筆者はたいへん心配している。例えば、現在計画されている同公園の整備事業をネタにして、“遊歩道も『自然にやさしい』木道にしました。” “池の造成も『多自然型護岸工法』を導入して、傾斜護岸・乱杭工法で見事に自然環境を維持しました。” “植生豊かな湿地を造成して、ホタルやト

ンボが飛び交う環境を作り出しました”等々、たちまちウケの良いキャッチフレーズを並べて、この地で“ビオトープ”的見本市を開催できそうな気がするのである。このような心配は、筆者の取り越し苦労であってほしいと切に願うが、かなりの精度で調査がなされ、貴重な動植物の生息が確認されている現在の北本市石戸宿の湿性環境を『自然観察公園』造成の名の元に破壊しておいて、そこに“ビオトープ”事業を展開するつもりがもし県にあるならば、筆者は、そのような考えは徹底的に批判をしていかねばならないと考えている。『自然観察公園を造る』ために、保全しようと思えばできるはずの『貴重な動植物の生息環境を破壊』しておいて、そこに疑似自然環境を造って、『これぞビオトープ』とやってしまっては、全国の自然保護関係者からいい笑い者になってしまうだろう。この地で自分なりに一生懸命昆虫を調査している筆者としても、これはとても恥ずかしい事態だ。

この地の湿性環境は、一度破壊されれば容易に復元しないほどデリケートなものであること、特に当地での生息が注目されているいくつかの昆虫の分布がすでに“遺存的”な状況であることなどは前報にもしつこく書いた。当地の生態系の中核となっている（と筆者は思っている）湿性環境を壊しておいて、何が“ビオトープ”なものか、と筆者は言いたい。

再度言う。『北本自然観察公園』が、立派な自然観察公園として全国に自慢できるものになるためには、景観としての見た目の好印象度や、一般県民へのアピールのしやすさを第1に考えるのではなく、この地がどれほど貴重な湿性環境を育んで来たか、そして、それをどのように保全して見せていくか、をしっかりと認識する視点がまず大事なのではないだろうか。

そのような意味でも、前述したように、当地の整備計画に対してある程度の影響力を持つであろう、そして県に“ビオトープ事業”を取り組ませるだけの業績をあげている“(財)埼玉県生態系保護協会”が、当地の生態系をどのように見ているのか、とりわけ、環境庁の“レッドデータブック”に取り上げられている数種の昆虫と植物が、石戸池の造成予定地に生息・生育している事実を、同協会はどのように受け止めているのか、という点に筆者としては大いに注目している。『珍しい種類がいるから貴重な環境だ』という言い方はあまり好きではないし、筆者の主張をそのまま受け取ってほしくはないが、『全国各地で姿を消して希少な存在となってしまった昆虫が、この地にはまだ残っている。それほど豊かな自然環境が残った貴重な場所だから手を加えずに保存すべきなのだ。子供達に観察させたい自然とは、現在の石戸宿そのものなのだ』という筆者の主張は、同協会に理解してもらえるだろうか。それとも、『サシバが繁殖すれば自然が回復した証です』（〈ナチュラルアイ〉1992年4月号、自然保護最前線！というページの【石戸宿（北本市）】の欄より）という一文に代表されるように、あくまで猛禽類の繁殖という物差し、言い方を変えれば“野鳥愛好家的”な視点で生態系をとらえようとするのだろうか？

確かに、池を造成してもサシバは戻って来るかもしれないのではあるが・・・。

しかし、県内平野部各地に遺存的に残された小規模ながらも貴重な緑地について、その生態系全体を緻密な調査の元にきちんと把握し、何を保護すべきなのかを行政に対して声高に明示していく力を持つ組織は、同協会のほかには存在しないのである。これまで行政の当該部署にしっかりと食い込んで『自然保護』『生態系保護』『ビオトープ』思想をアピールしてきた実績をもつ同協会には、これらの言葉が流行語として行政の口から次々と溢れ出るであろう今後も、ブ

ームではなく自然科学的な裏付けとともにそれらを実践する組織であってほしいと期待している。“野鳥”は、どこでも好意的に受け止められる生き物であろう。行政としても、“野鳥”を前面に押し出すことは、『自然保護に積極的に取り組んでいるというポーズ』を住民にアピールしやすいものがあるだろう。しかし、野鳥を調査しただけでは、その生態系が把握できるはずはないのだ。(財)埼玉県生態系保護協会が、行政に対して“野鳥の会”的視点で『自然保護』や『生態系保護』をアドバイスしていくことは、行政は住民に“親しみやすい切り口”的自然保護行政をアピールできるメリットがあり、同協会も、これまで蓄積した“自然保護アドバイザー的”な様々なノウハウを十分活用することができるだろう。しかし、それでは行政側に“生態系を保護する”確かな目は育たないのでないのか。少々乱暴な見方をすれば、“ビオトープ”的オピニオン・リーダーである(財)埼玉県生態系保護協会が、もし生態系全般を詳細に把握せずに、野鳥の生息種の種構成を中心とした“生態系の見方”を実践していくならば、行政にとっては短い調査期間で《自然環境調査》の報告書が仕上がり、その後はマニュアル通りの“ビオトープ”事業をこなしていけば“生態系保護をした”という免罪符をもらえる、ということになってしまうのではないか。それでは、せっかくの“ビオトープ”事業も、本質を見失った非常にバランスの悪いものになってしまうのではなかろうか。

筆者自身も(財)埼玉県生態系保護協会の会員であるが、問題発言と批判されることを承知で敢て言えば、『(財)埼玉県生態系保護協会は、行政御用達の便利屋であってはならない』、と思うのである。

さて、最後にもう一度疑問点を提示したい。

“この自然観察公園に池を造ると、どんな良いことがあるのだろうか?”

2) 湿地の乾燥化を防ぐべきである。

ここまで長々と書いてきた“湿地を潰すな”という主張のすぐ後で、“湿地を維持する工夫をすべきだ”，と書かなければならぬのは甚だ情けないことなのだが、数年前に比べて、湧水の湧出量も減ってきたようだし、湿地のあちこちに油膜が浮いている状況も目につくようになった。筆者は、当地の生態系にとってこの湧水こそが生命線だと思っているのだが、明らかに、この地の湿性環境は悪化しつつある。だからといって、“湿地が乾燥してしまう前に池を造るほうが良いでしょう”などという意見があるとすれば、それは“生態系保護”的セの字も考えない無謀な提案なのだろうが、前項では扱わなかったものの、もしかしたら、池を造る本当の理由は“湿地が乾くくらいなら池を造った方がまだマシ”という大胆なアイデアなのかも知れない(この項は、次回に続く)。

誌面も尽きた。次回は、当地の昆虫相についての新知見の整理と共に、7月1日に同地にオープンする予定の『埼玉県自然学習センター』の様子もレポートする。この建物にはまだ入れないが、外から見た感じでは2階にある大きなガラス張りの観察窓が素敵だ。中がどうなっているのか判らないが、フロアにピアノでも持ち込んで、広い窓越しに雑木林を眺めながら『鳥と虫と花のための音楽会』などというサロンコンサートでもやったら気持ちが良さそうだ。

同公園での採集禁止反対の話も、次回に持ち越し。『カブトムシやトンボにマーキングして、個体識別をやったら絶対に面白い。自然観察に来る子供も絶対興味を持つ・・・』という提案も次回送り。次回も長くなりそうだ。なお、引用・参考文献は、文中に明示したので省略する。

.....

モンキチョウは周年発生?

塘 久夫

.....

このところ宮代町では真冬にモンキチョウが飛んでいる。昨年(1991年)のモンキチョウの初見日は1月27日、そして今年(1992年)の初見日は1月5日だった。

この4年ほど暖冬が続いているとは言え、1月、2月は毎朝真っ白に霜が降りるし、水たまりには氷が張る。雪の降る日もあるし、北風の強い日も多い。そんな真冬の、寒風の吹きすさぶ中を、多数のモンキチョウが飛び交う様は少し異様に思える。

もともとこの蝶はオツネンチョウ(越年蝶)の別名があるくらい、春早くから姿を見せる蝶で、宮代町でも例年は2月下旬から3月上旬には、その年初めての成虫が見られていた。しかしこの2年ほど異常に初見日が早く、しかも初見日以降継続して姿が見られ、数も増えてくる。昨年などは本来寒さがもつとも厳しい2月上旬には、小川の土手を多数のモンキチョウが活れ飛び、あちこちで交尾も見られた。

真冬にモンキチョウが見られる場所は、古利根川、備前前堀川、備前堀川、隼人堀川などの中小河川の土手である。これらの河川の土手では、斜面の上の部分は冬枯れの茶褐色だが、川面に近いあたりは冬でもいくらか気温が高いらしく、この部分だけは野生のカラシナやナノハナ、トウダイグサ、セントウソウなどが緑の葉をつけ、青々としている。また、風の当たらない日溜まりでは1月からタンポポやオオイヌノフグリ、ホトケノザなどの花が咲き始める。この場所でのモンキチョウの主な食草はカラスノエンドウだが、この草もやはり川面に近い部分みは青々と繁っている。

この時期、さすがに菜の花はまだ咲いておらず、真冬のモンキチョウは吸蜜植物としては、オオイヌノフグリをもっとも好む。成虫は北風が強くても天気が良い日は活発に活動するが、気温の低い曇天時や雪の降った日にはさすがに活動するモンキチョウは見られない。しかし捜せばロゼット状に葉を広げたスイバやカラシナの葉の奥にもぐり込んでいる成虫を見つけられる。

元来この蝶は低温には強く、むしろ高温が苦手のようだ。平年でも早春や晚秋には数多くの成虫が飛び交うが、真夏の7月・8月にはほとんど姿は見られない。

この数年の暖冬の特徴は、最高気温は平年並でも最低気温が高いことで、平年なら連日氷点下3~4°Cに下がるこのあたりでも、この2~3年は最低気温が氷点下にならない日も増えてきた。このためモンキチョウの幼虫は真冬でも成長を続けられるようだ。いずれにせよこの2年ほど宮代町ではモンキチョウの成虫が、秋には初冬の12月上旬まで見られ、翌年の1月からは早くも再び成虫が見られるようになっている。この蝶の常態での越冬態は中令幼虫のはずだが、この数年の暖冬は、モンキチョウをあたかも周年発生にしてしまったかのようだ。

もっとも今年（1992年）が初見日以降、発生数が順調に増えたわけではなかった。むしろ2月3月の発生状況は平年より少なく、平年なら普通に見られるはずの3月中旬以降になんでも個体数の少ない状況が続いた。そしてこの傾向は小河川の土手ほど顕著であった。これは昨年の秋に、大雨による河川の増水が続いたためではないだろうか。昨年の9月、10月は毎週のように台風が来襲し、大雨で、河川の水位が上昇した状況が続いたが、この水位の上昇傾向は小河川ほど顕著であった。このため小河川では土手で生息していたモンキチョウの各態の虫体が押し流されてしまったのではなかろうか。小河川では昨年の秋も成虫の発生数が非常に少なかったことからも、このことが推定される。

表1 最近のモンキチョウの初見日・終見日

| 年 | 初見日（場所） | 終見日（場所） |
|-------|--------------|---------------|
| 1986年 | 3月8日（備前前堀川） | 11月3日（備前前堀川） |
| 1987年 | 3月20日（備前前堀川） | 11月3日（備前前堀川） |
| 1988年 | 3月6日（備前前堀川） | 11月26日（備前前堀川） |
| 1989年 | 2月19日（備前前堀川） | 11月5日（備前前堀川） |
| 1990年 | 2月18日（備前前堀川） | 12月8日（備前前堀川） |
| 1991年 | 1月27日（備前前堀川） | 11月4日（隼人堀川） |
| 1992年 | 1月5日（備前前堀川） | |

表2 真冬（1月・2月）のモンキチョウの目撃記録

| 年月日 | 場所 | 目撃数 |
|-----------|-------|-----|
| 1990-2-18 | 備前前堀川 | 2 |
| 2-24 | 隼人堀川 | 4 |
| 1991-1-27 | 備前前堀川 | 1 |
| 2-3 | 備前前堀川 | 6 |
| 2-9 | 備前前堀川 | 37 |
| 2-24 | 隼人堀川 | 2 |
| 1992-1-5 | 備前前堀川 | 1 |
| 1-13 | 隼人堀川 | 1 |

・・・・・

詩にあらわれた蝶（1）

荒木 崇

・・・・・

碓井さんが「音楽の中の虫たち」と題する連載を始められたのに触発されて、私も表題のようなエッセイを書いてみようと考えた。

もう何年も前のことになるが、清岡卓行の「薔薇ぐるい」という小説を読んだ。その中には主人公の私大教授が大学でおこなう「詩にあらわれた薔薇」という講義が折りませられていて、この小説を読むなかで私たちは古今東西の薔薇をめぐる詩のアンソロジーに接することができるようになっていた。私はこの小説を読んで、蝶や蛾についても同様のアンソロジーを編みたいと思ったものだ。

以来数年、いまだに私の詞華集の収集品は多くないし、私の渉獵も「古今東西にわたる」というには程遠いが、その一端をみなさんのお目にかけたいと思う。

この種の収集の場合、収集の対象がいつのまにか滅びてなくなってしまったりすることがないのは、私たちにとってたいへん幸いなことである。そうであるから、現実のチョウの場合とちがって、焦らずに少しずつ私のコレクションを充実させてゆこうと思っている。この小文を読んで、一緒に収集をしようという方が現われて下されば、私としてはこれ以上嬉しいことはない。

さて、収集には常に一定の規準がともなう。私の場合のそれは、「詩としての美しさ」であり、私のコレクションは、「全集」ではなく「詞華集」を意図している。そのため、よく知られたもの、あるいは具体的なチョウの名称があらわれるものでもあえて採らないものがいくつかでてこよう。結局のところそれらの詩は、私の心の琴線にふれることがなかったのだ。

* * * I * * *

春

安西 冬衛

てふてふが一匹韁靼海峡を渡って行った

（「軍艦茉莉」所収）

まずこの詩を採ろう。おそらく近・現代の、蝶をテーマとした日本の詩の中で、これほど豊かなイメージを湛えているものはほかにあるまい。様々な位相での対比が、この詩におけるそのようなイメージ

の広がりをささえている。そのことは例えば、

蝶々が一匹ダッタン海峡を渡って行った

というような書き換えによってこの詩の生命が半ば断たれてしまうことに端的に示されよう。

私は初めてこの詩を読んだときからある明確なイメージを心の中に描き続けてきた。そしてその後読む度ごとにそのイメージをめぐるヴァリエーションを楽しむことにしている。

安西冬衛は昭和初期の詩人。この詩は昭和四年の作である。私は安西冬衛の詩のすべてが好きなわけではない。しかし、私は「軍艦茉莉」、それからこの「春」を愛してやまない。彼の審美主義がことのほか徹底した詩の好例であるからだ。

* * * II * * *

聖なるあこがれ

J. W. V. ゲーテ

だれにも教えぬのがよい、賢者のほかには、
俗人にはどうてい解らぬことゆえに。
わたしはほめ讀えたいのだ、
炎にとびこむことをねがうような生命を。

おまえを生み、おまえを生んだ
愛の夜のさわやかさのなかで、
あやしい感情がおまえをどらえる、
しづかにろうそくが燃えるとき。

もうおまえは暗闇のなかに
どらわれてはいないので。
新たな欲求がおまえを駆りたて、
けだかい交合へと進ませる。

道のりの遠さを苦にせず
憑かれたように飛んてきて、
そしてついには、光にこがれて、
蛾よ、おまえは炎に焼かれた。

「死して、そして生まれよ」という
このことばを身につけぬうちは、
おまえはこの暗い地上の
くすんだ客人にすぎないのだ

(神品芳夫訳)

1817年に”Vollendung”（「成就」）という題名で書かれ、表題のように改題されて晩年の詩集「西東詩集」におさめられたこの有名な詩を次に採ることにしよう。西洋の詩の中から蝶を描いたものを選ぼうというとき、この詩はまずその最高のものとして筆頭に挙げねばなるまい。この詩に晩年のゲーテの到達した精神の高みの結晶化をみる人すらいるのだ。私はこの詩をG.バシュラールの「蠟燭の焰」によつて知り、後になって原詩に親しんだ。輝きと強さ、そして静けさと動きとが一体となった詩である。

そのような詩について、あれこれとむなしい言葉を連ねることを私は自ら禁じよう。そうして日本画の好きな方は、あるいはこの詩を読んで速水御舟の「炎舞」という絵にこの詩の世界と通ずるものがあるのを感じられるかもしれない、とだけ付け加えることにしよう。

(あらき たかし 〒399 長野県松本市寿台 2-4-23)

浦和市南部領辻のムラサキシジミ採集例

中川利勝

筆者は、浦和市南部領辻鷺神社において、ムラサキシジミ（新鮮個体）を採集しているので報告する。データは以下の通りで、標本は筆者が保管。

1♀ 浦和市南部領辻 4.VIII.1991

過去における浦和市内のムラサキシジミ採集例としては、1960年以前のものとして、浦和市駒場蓮昌寺、同市三室氷川女体神社等において若干の個体が採集されていたようであるが、その後しばらく明確な採集報告はない。

最近の採集例としては、37年ぶりの市内での記録として、1990年8月1日、南部領辻1♂採集1♂目撃の報告（巣瀬、昆虫と自然25(12), 1990 pp. 16-19）があり、この時採集された個体1♂については、筆者もシラサギ記念自然史博物館において、標本を確認している。

浦和市南部領辻における筆者の採集例は、おそらくこれに次ぐものと思われる。

<参考文献>

碓井徹(1971) 浦和市の蝶類、浦和高校生物部 F A M I L Y Vol. 22; 24

市川和夫・原聖樹(1978) 埼玉県の蝶類、埼玉県動物誌；271-272

巣瀬司(1990) 環境指標としての蝶、昆虫と自然25(12); 16-19

(なかがわ としかつ 〒335 蕨市北町 1-13-10)

【訂正】

☆ 寄せ蛾記62号 pp. 1205-1208. 中川利勝：埼玉県産蝶類記録(2)
ミヤマチャバネセセリ 22.IV.1990 浦和市大谷口1♂1♀ (第2化個体) →
22.IX.1990

☆ 寄せ蛾記58号(1991) 離倉正人：埼玉県におけるキベリマメゲンゴロウの採集記録
p. 1092の中で、埼玉県初記録としていますが、記録は既にあります。

寺山 守(1983) 熊谷市産動物目録基礎資料年報別冊第1号,

立正大学北埼玉地域研究センター, p. 32

採集地点はD-d3とメッシュコードでのみ表示。地図を見ると河川敷に砂礫地が広がる大麻生付近のようである。25.IV.1982、個体数は不明。このほか、北本市史 原始・自然資料編(1991)にも、本種が荒川に生息するといった記述があり、荒川中流域にはかなり広く生息しているのかもしれない。

自治体や大学、博物館が独自に調査した報告書の類は、必ずしも入手が容易ではないが、埼玉県に関する限り、浦和市の県立図書館内の埼玉資料室にかなりそろっており、複写も可能である（貸し出し不可）。地域の目録も少なからずあるので、関心のある方は利用されたい。

☆ 寄せ蛾記62号(1991) 牧林功：市川和夫氏採集の長野県南佐久郡川上村のシリアゲムシ
p. 1234の中で、B-4. シバカワトゲシリアゲ の学名

P. *aralavae* ⇒ P. *arakavae*

千葉県愛宕山産シルビアシジミの記録

原 聖樹

1978年5月1日、千葉県安房郡丸山町下細田において新鮮なシルビアシジミ1♂が得られているので、新産地として記録しておく。

愛宕山南麓嶺岡牧場の牧草栽培斜面にて青山潤三氏が採集されたもので、本個体は海野・青山(1981)「日本のチョウ」(小学館)のp. 120に、春型♂として図示されていて、データーは無記入である。

末筆ながら、筆者に標本を提供され発表を委ねられた青山潤三氏に感謝する。

(はら せいき 〒229 相模原市光が丘 1-10-16)

川越・青梅・秋川・八王子の蝶メモ

原 聖樹

1989年9月15日、埼玉県・東京都において確実に目撃した蝶をメモする。

1. 川越市市場: ミヤマチャバネセセリ 1♀○ [13:25 (晴), ススキの垂直に近く立っている葉裏に翅閉じて止まり、数秒間じっとしていたが、やがてゆっくりと腹部を曲折して葉裏にし卵を産み、数秒後に飛び立った] 1♀○, イチモンジセセリ 多数♂♀, キチョウ 多数♂♀, モンキチョウ 2♂1♀, ベニシジミ 2♂○, ルリシジミ 1♂○, ツバメシジミ 1♂1♀○ 1♂1♀●。
2. 青梅市藤橋: ウラギンシジミ 1ex.
3. 秋川市友田町: キチョウ 多数♂, ツバメシジミ 2♂2♀●。キタテハ(秋型) 1ex., ヒメウラナミジャノメ 1ex.。
4. 八王子市戸吹町: キチョウ 多数♂♀, ツバメシジミ 1♂1♀ (交尾)。

(はら せいき 〒229 相模原市光が丘 1-10-16)

大宮市内でクマゼミの声を聞く

平野 進一郎

大宮市内で以下のとおりクマゼミの鳴き声を確認しているので報告しておく。

1991年7月27日、午前9~10時頃にかけて大宮市三橋の大宮西高方面で、筆者の弟、高次郎がクマゼミが鳴いているのを聞いている。また、筆者自身も1986年の8月末に同市堀之内町内にあるケヤキの木立て本種が鳴いているのを記憶している。

(ひらの しんいちろう 〒330 大宮市寿能町 1-31, 2-604)

大宮市内のクワガタムシについて

平野 進一郎

筆者は大宮市内において3種のクワガタムシを確認しているが、同市内では急速な開発が行われつであることから、いわゆる普通種でも記録しておくべきであろうと考え、現状等を簡単に記しておく。

1. コクワガタ

当然のことながら最も普通に見つけることのできる種である。市内中心部の大宮公園などでも割合に多く見られる。ただし、1991年は樹液の出が悪かったためか、全体に個体数は少なかった。

2. ノコギリクワガタ

前種とほとんど同じ状況である。前種と比べて移動範囲が広いのか、住宅街に残された孤立木のクヌギや、団地の灯下にも飛来することが多いようである。

3. ヒラタクワガタ

市内では偶然に見つかる程度と思われる。筆者は、市内西部の指扇方面で1986年7月初旬にヤナギから採集された雄を確認している。また、近隣の川越市などの記録があることから、この地域一帯に広く生息しているのではないかと思われる。

この他に市街地のペットショップなどではオオクワガタや南西諸島産のクワガタムシが売られていることから、将来これらのクワガタムシが野外で発見されるかも知れない。

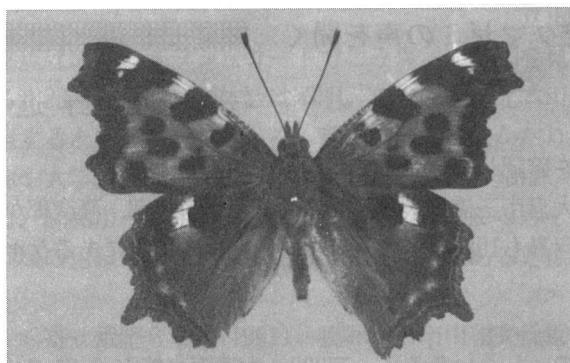
〔参考文献〕

吉越肇 (1998) 川越市周辺におけるヒラタクワガタの記録 寄せ蛾記(51):894

(ひらの しんいちろう 〒330 大宮市寿能町 1-31, 2-604)

奥武蔵伊豆ヶ岳にてエルタテハを採集

広田 努



写真：採集個体

筆者は、埼玉県奥武蔵の伊豆ヶ岳において、エルタテハ1♂を採集しているので報告します。データは以下の通り。

エルタテハ 1♂ 埼玉県伊豆ヶ岳

1. IX. 1991

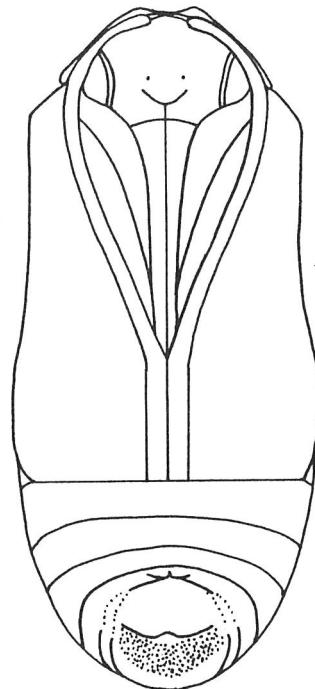
未筆ながら、報告をすすめて下さった中川利勝氏に心より感謝します。

(ひろた つとむ 〒251 神奈川県
藤沢市本鶴沼 3-13-6)

【訂正】

☆ 寄せ蛾記63号 pp. 1249-1289. 牧林功: ミドリシジミ -その認識の過程と実像について-

- p. 1251 下から3行目 似10いる
 ⇒ 似ている
- p. 1257 下から11行目 タキシラ属
 ⇒ テクラ属
- p. 1260 図2の左側を、右図に改める
- p. 1263 図4の説明の後に、
(河田, 1930) を挿入。
- p. 1264 図4の説明の後に、
(河田, 1930) を挿入。
- p. 1269 図6の説明の後に、
(Shirozu & Yamamoto, 1956) を挿入。
- p. 1270 図8の説明の後に、
(Shirozu & Yamamoto, 1956) を挿入。
- p. 1271 図9の説明の後に、
(Shirozu & Yamamoto, 1956) を挿入。
- p. 1278 図14の上の説明 Bミドリシジミ幼虫 ⇒ Aミドリシジミ幼虫



□ 『会員名簿 1992年版』を作ります □

☆ 前回会員名簿を発行したのは1987年、寄せ蛾記50号の発行を記念したもので、発行当時の会員数は157名でした。それから5年がたち、会員数も200名を越えています。5年毎に会員名簿を発行するのが区切りがよさそうですし、来年1993年は、埼玉蛾類談話会の時代から数えて発足30周年（当会のマークの“1963”は、発足年を表しているのです）で、いろいろな行事？や刊行物？が計画されており、なかなか会員名簿にまでは手がまわりそうにありません。そこで、今年中に会員名簿1992年版の発行を計画しています。作業は、次号にハガキ同封 ⇒ 秋に回収 ⇒ 初冬発行 の予定。

寄せ蛾記 64号 目次

| | |
|----------------------------|------|
| 玉木 長寿：埼玉県の興味ある双翅類（4） | 1333 |
| 同上(2), (3)の訂正 | 1337 |
| 石澤 直也：所沢の鳴く虫について | 1338 |
| 三宮 幸雄：北本市でダビドサナエを採集 | 1342 |
| 磯野 治司：北本市におけるダビドサナエの採集記録 | 1342 |
| 田中 剛：武藏野台地のクロヒカゲについて | 1343 |
| 南部 敏明：破風山でダイミョウヒラタハナバエを採集 | 1347 |
| 磯野 治司：北本市でムラサキシジミを採集 | 1347 |
| 碓井 徹：音楽の中の虫たち（4） | 1348 |
| 中川 利勝：狭山丘陵のオオムラサキ | 1350 |
| 碓井 徹：石戸宿、その後（2） | 1355 |
| 塘 久夫：モンキチョウは周年発生？ | 1363 |
| 荒木 崇：詩にあらわれた蝶（1） | 1365 |
| 中川 利勝：浦和市南部領辻のムラサキシジミ採集例 | 1368 |
| 訂正 3件 | 1368 |
| 原 聖樹：千葉県愛宕山産シルビアシジミの記録 | 1369 |
| 原 聖樹：川越・青梅・秋川・八王子の蝶メモ | 1369 |
| 平野 進一郎：大宮市内でクマゼミの声を聞く | 1369 |
| 平野 進一郎：大宮市内のクワガタムシについて | 1370 |
| 広田 努：奥武蔵伊豆ヶ岳にてエルタテハを採集 | 1370 |
| 訂正 | 1371 |
| (事務局より)：『会員名簿 1992年版』を作ります | 1371 |
| 会報 | 1372 |
| 編集後記 | 1372 |